

ココロ
モザイク
-kokoro mosaic-

体験版（約50,000字）

*Hシーンは中略しています



Seishun Drip
Written by Nagisa Mihal

□ ■ 1章 □ ■ □

夏が来る。そう気づく瞬間がある。

玄関を出た時に体を包む湿気や、肌を焼く朝の日光、体育の授業中に座ったグラウンドの温もり。傘に当たる雨粒の音、噴水の水のきらめき、放課後に聞こえてくる運動部のかげ声。そんなに長く生きてきたわけじゃないけど、同じシチュエーションは一度も無かった。

そして今年は新聞部の部室に入りこむ風に夏を感じた。

梅雨が終わると、湿気が雨になって地面に吸いこまれたかのように一旦湿度が下がる。俺の住む高守市たかもりは周囲を山に囲まれた盆地にあり、夏は暑くて冬は寒い。この過ごしやすい気候はたった一週間ほどで終わってしまう。

それを堪能するため、今日も部室の窓を全開にしていた。

中庭を中心に立てられた『□』型の校舎のうち、教室棟は南側、特別棟は北側に位置し、新聞部は特別棟の三階にある。午後に日が入らないので、気持ちのいい風だけを満

喫できるのだ。

しかし爽やかな風に、土や草の生臭さがわずかに混じっていて俺は顔をしかめた。夏は嫌いだ。なにかが始まりそうな予感がする。

みんなはその感覚を楽しそうとか、ワクワクするとか肯定的にとらえる。でも俺は嫌いだった。

大きな事件は起きず、似た日常を繰り返しながらも、ちょっととした楽しさが混じる。そういう小さな生活が理想だから。今みたいに、ぼうつと広がる住宅街を眺める時間がとても好きだった。

するとびゅうと音を立てて強い風が吹きこむ。逃げる場所がないので室内で渦を巻き、机に並べていたプリントが一斉に乾いた音を立てた。

「うわっ！ 先輩、窓！ 窓閉めてください！」

振り返ると後輩の初島楓はつしまかへでが失敗した阿波踊りみたいに両手をあげ、宙を舞うプリントを掴もうとする。だが頑張りもむなしく、全て床に落ちてしまった。

新聞部の部室は普通の教室を可動式のパネルで半分に仕切って作られている。中央には六つの事務机をくっつけた島があり、壁にはスチール製の棚が、反対側にはホワイトボード。物がたくさんあって圧迫感を感じる。

そして窓の近くのパネルは破れる薄いもので『非常時はここを破って逃げてくださ

い』という黄色いステッカーが貼られている。

隣の部屋は手芸部だ。たまにミシンの音が聞こえるが、基本的に活動日がズレているので今日も人の気配はない。

「先輩！ 閉めてくださいってば！」

悲痛な訴えに窓を閉めると、プリントは一斉に大人しくなった。

「もー、だから閉めてって言ったのにー。——いたっ！」

ガンツと大きな音がたつ。机の奥に潜った楓が後頭部を打ったのだ。

「つつー……」

涙目になって後頭部をさすると、茶色がかったふわふわの髪が揺れた。

楓は新聞部でたった一人の一年生だ。小柄な体格に大きな目、表情がころころと変わるので小動物っぽい。一緒にいて癒やされるやつだ。

「悪い悪い。でもプリントは並べなくていいって言っただろ。どうせ誰も来やしないんだから」

部屋の時計はちょうど十八時を指していた。完全下校まであと三十分なのに部室には俺と楓しかない。

「だからって一枚ずつ渡すのも感じ悪いじゃないですか。来ると思わなかった、みたいで」

「塩対応でもしかたないだろ。運動部が優先なのはわかかってることだし」

六月の中頃に行われた一学期の期末テストが全て返却されると、いよいよ夏休みへのカウントダウンが始まる。気温はさらに高まり、体力のない文化部はだれていくが、運動部は逆だ。夏の総体に向けて、勉強で溜まったフラストレーションを発散するように気合いが入る。

毎日のようにプールから笛が聞こえ、体育館からはバスケット部のドリブルとバッシュが床を擦る音が響く。今も裏門から土でまだらになったユニフォーム姿の軟式野球部が緩く整列して出ていくのが見える。これから近くにある河川敷で自主練をするのだ。団体競技は試合時間がかかるので予選開始が早い。野球部は今週末に初試合だ。

どうして予定に詳しいかという点、取材に行くからだ。

新聞部は季節ごとに校内新聞『千紫万紅』せんしばんこうを発行する。夏号では地区予選から各部の試合に同行して、終業式前に号外を、夏休み明けには総合体育大会特集号を出す。

学校新聞の内容はほとんどテンプレートだ。A3片面に、春は新入生歓迎と新任の先生の紹介、秋は文化祭の特集、冬は生徒会選挙。

しかし夏号だけは違う。A2用紙に両面印刷し、半分に折った四ページ分の大判になる。取材は部員全員で行い、今日は担当する部を決める大事な会議……のはずだが俺と楓以外は誰も顔を見せない。

新聞部の部員は八人。一人は幽霊部員なので実質七人だ。そして楓をのぞいた、つまりここにいない五人は運動部と兼部している。

余裕があれば顔を見せると言っていたが、望みは薄い。総体と取材、どちらを優先するかなんて火を見るより明らかだ。

「来ませんねー」

待ち飽きたのか楓は部室のノートパソコンでマイクラフトをしていた。

「しゃーない。勝手に割り振っちゃまおう。月曜までに作っとくから、手分けしてみんなに配ろうぜ」

去年も同じ状況だったので、こうなることは予想していた。

「わざわざ配るんですか？ メッセージを送ればいいんじゃない？」

「直接渡さないと、見てなかったと言うヤツが出るんだよ」

「あー、なるほど。了解です」

楓は緩く敬礼をしてみせる。

「でも先輩、こないとわかってるなら、いつそのこと僕らだけでやっちゃえば良くないですか？」

「そういうわけにもいかないだろ。部員なんだから仕事はやってもらわないと」

というのは建前だ。人に頼み事をするのは面倒だし、できるなら全て自分でやってし

7

まいたい。だが試合は土日に集中するので、二人では手が足りないのだ。

「真面目ですなー。だから部長にも頼りにされてるんでしょーうけど」

「頼りにされてるんじゃないよ。投げられてるだけ」

自分から進んで引き受けたわけじゃないけど、やるならちゃんとしたい。

もし兼部している人の部が勝ち進めば、当然、県大会、全国大会の日は取材には行けない。だから全ての部の試合日を調べて、どう回ろうが支障がないように組む必要があった。

さらに、その人が出場する可能性がある県大会や全国大会の日には割り振ってはいけない。自分が出場するかもしれない試合の日に、取材の予定を入れられていたら、負けると決めつけられたみたいで良い気がしないからだ。

ここまで気を遣わないといけないなんて、とても面倒くさい。だけど部長から『頼りにしてる』なんて言われたら、やらないわけにはいかなかった。損な性格をしていると自分でも思う。

うちの学校は歴史がある分、ルールも古く、必ず部活に入らなくちゃいけない。入学してすぐの部活選びではとにかく楽な部を探した。運動部は練習や試合が嫌なので論外。文化部で、さらに大会や活動が少ない、という理由で新聞部を選んだ。なのにこんな仕事をすることになるなんて。

「取材のメンバーって決まってるんですか？」

「うん。一応な」

ルーズリーフに手書きしたものを楓に渡す。ふむふむ、と唇の下に指をそえて読んでいたが、ある項目で視線が止まった。

「剣道部の取材は僕にしてくれたんですね」

「ああ。綾太の試合見たいだろ」

「ちよつとー、そういうの良くないですよ。コウシコンドウじゃないですかー」

そう言いつつ嬉しそうだ。楓は剣道部二年の長谷部綾太と付き合っているからだ。

「取材はお前に任せるわ。俺は写真担当な」

「あれ？　なんかノリ気じゃない感じですか？　佐倉先輩だって長谷部先輩の応援したい

んじゃないんですか」

綾太は俺の親友で幼なじみでもある。もちろん応援する気は満々だ。

「そうだけど、部長のえつーと、入谷いりや、だっけ？　あの人が苦手なんだよ」

「地区予選の取材中に怒られたんですでしたっけ？　けどそれって先輩が騒いだからって長

谷部先輩から聞きましたよ」

「だって親友が県大会初出場を決めたんだぞ。テンション上がるに決まってるじゃん」
剣道部の予選は六月の第二日曜日、なんと期末テストの直前にあった。予選はブロッ

クごとに別れ、それぞれの二位以上が県大会に進める。そこでブロック一位になり、見事に県大会出場を決めたのだ。

だから嬉しくて、つい大声を出してしまい、怒られた。それ以来、あの人が近くにいと変に緊張してしまう。

窓から真下を見る。そこには体育館に併設された剣道場があった。

少しだけ窓を開けると、隙間から竹刀の音やかかけ声が聞こえる。そこに甲高いものと、低いものが混じっていた。綾太と入谷部長のものだ。

入谷部長は小さい頃から剣道をしていて、一年から県大会に出場する実力者だ。背が高く、一つ上の学年とは思えないほどがっしりとした体格を持つ。髪は短く、目つきは少し怖いくらい鋭い。まさに武者という雰囲気の人だ。

見た目は威圧感があるが、性格は温和で部員からの信頼は厚い。特に綾太は俺が悪口を言うのと怒るほど尊敬している。

頭を振る。先輩は去年、全国大会に出場し、今年も大いに期待されている。新聞部でも取材したせいで、やたらと詳しくなってしまった。苦手なのに詳しいなんて、おかしい話だ。

「それより、綾太とはどうしてんの？」

「え？ うーん、ぼちぼちって所ですかねー」

話題を変えようと質問したが、軽く笑って誤魔化される。

「もしかして、あいつまだ悩んでんの？ 『お試し』を始めてから一ヶ月たつぞ」

楓は一ヶ月前、綾太に告白した。だが返事は『考えさせて欲しい』というもので、一週間も待たせたうえに、お試し期間を作ることを提案してきた。初まりからその調子だったので、未だに二人の仲は一ミリも進展していない。

「しょうがないですよ。だって長谷部先輩は今まで女の人が好きだったわけですし」

単に奥手なだけだと思う。だってあいつは女子とも付き合ったことがないし、もちろん童貞だから。

「それにフられちゃうよりもお試しでも付き合ってくれるほうがいいですし。けど、そろそろ僕の魅力に気づいてくれないかなー」

おどけてみせるが、少し早口になっていた。

もし俺が誰かに告白して仮でもOKされたら、絶対に舞い上がってしまう。拒否されなかったということは、好意があるということなんだから。デートの計画は立てるし、勝負服も買う。キスも期待するし、もちろんセックスの妄想も。なのに一ヶ月も待ちぼうけを食らうなんて、俺なら耐えられない。

「これでもアピールはしてるんすけどねー。おととい、週末に遊びに行きましようってメッセージ送ったんですよ。雑談ならすぐに返してくれるのに、そういうときだけ遅く

つて。帰ってきたの今日の朝なんです」

「あいつ、変に真剣に考えてるんだろなあ」

「一緒ならどこでもいいのに、なんでそんなに肩肘張るんですかねえ。もう……参っちゃうなあ」

演技がかった動きで肩をすくめる。

「大丈夫ですよ。僕には佐倉先輩っていう強い味方がいますし。また何かあったら相談に乗ってください」

「おう。もちろんだ」

俺は告白する前から楓の相談にずっと乗っていた。可愛い後輩だし、二人はお似合いだと思ったからだ。告白が一応成功したのも半分くらいは俺の功績だと自負している。俺自身は誰かと付き合ったことも、好きになったこともないけれど、こういう役はけっこう得意なのかもしれない。

ただ事情に詳しい分、俺も今の状況にやきもきしていた。あとで探りを入れてみよう。すると完全下校時間を知らせる予鈴が鳴った。

「やべっ。もうこんな時間か」

慌てて片付けを始めると、楓が首をかしげる。

「なんでそんなに急いで——。あっ、そっか。今日は金曜でしたね。ならカギ締めはや

るので行ってください。長谷部先輩、もう待ってますよ」

「わりい。ありがとな」

通学鞆を掴み、楓に後を任せて廊下に出た。

長谷部綾太には変わった趣味がある。変という意味ではなく、他の人とは大きく違う、という意味で。

昇降口で上履きから靴に履きかえ、外に出る。楓の予想通り、すでに綾太は校門横で待っていた。

「よっ、待ったか？」

「全然。僕も来たところ」

正面に立つと、自然と顔が下を向く。

短く切った髪に丸い顔の輪郭のせいで私服だと小学生によく間違われる。けれどまっすぐな眉と意志の強さを感じさせる目が凜々しい。姿勢もいいので、あと数年すればカワイイから格好いいにクラスチェンジするだろう。

そして制服が不自然に体に合っていた。成長期まったただ中の俺たちはすぐに服のサイズが小さくなる。俺も夏用の学生ズボンが短くなってしまい、アンクルパンツみたいに

靴下が丸見えだ。

でも綾太は違う。買いかえたという話は聞いていないので、つまり、そういうことだ。

「楓は？」

「お邪魔虫は遠慮します、だつてさ」

「そっか。んじゃ行こう」

通学路に出て、片側二車線の道路を進む。

俺たちが住む高守市は周囲を山で囲まれた盆地にある。

特別、栄えているというわけでもないが、寂れているわけでもない。市内には遊ぶ所もあるし、イオンモールもあつて普段の買い物は不自由しない。山間を走るJRに乗れば、政令指定都市まで一時間もかからない。平凡な地方都市というのがとても似合う町だ。

北から南に流れるささきかわ拆川で東西に分かれており、西には戦国時代に建てられた城を中心にオフィスビルが広がり、東側は住宅地と学校がある。特色と言えば地下水が豊富で、温泉が多いくらいだ。江戸時代にはたくさんの人が湯治に來た記録が残り、今も町中に銭湯がある。

大したことのない歴史なのに、新聞部の活動で民俗資料館に取材に行ったのですっかり覚えてしまった。古くて面白味はないけど、嫌いじゃない。

「あいつ、悩んでたぜ」

「誰が？」

「楓に決まってるだろう。お前がいつになっても手をつないでくれないーって」

「そんなことまで話してんの？」

「仕方ないだろう。あいつが勝手に話してくるんだから。でもよ、付き合って一ヶ月なのに手をつながないってどうかと思うぞ」

「じゃあさ。悠貴は楓が男が好きって聞いたとき、すぐに受け入れられたの？」

「いや、結構悩んだ」

「だろ？ 僕だってそうだよ」

男が好き男がいるのは知っていた。LGBTの授業で習ったからだ。本物のゲイの人が学校に来て、体験談を話してくれた。俺たちの年齢の頃には自覚していたとも。

そこで俺たちの中にもいるかもしれないと言われたが、実感がわかなかった。ふざけて友達とゲイごっこをして先生にキツく叱られたくらいだ。

だから楓が当事者で、相手が綾太と告げられたとき、かなり驚いた。今は一応、受け入れているが、100%かと聞かれると自信はない。

現に俺はゲイって言葉を口にできず、男が好き、なんて回りくどい表現を使っている。言い切れないことは『今までの楓』と『ゲイの楓』をイコールと考えられてい

ないからじゃないだろうか。

「でもさ。楓だって勇気を出して告白したんだぞ。それに答えないとかビッグじゃないよな？」

小学生低学年の頃、綾太は『俺はビッグになるんだ』が口癖だった。当時、放送していたアニメの主人公の決めセリフだ。地位やお金を求める小物っぷりを象徴するものだったが、最終回では絶望した主人公に向けて相棒が放った名言でもあった。

放送が終わっても良く口にしていたが、身長に悩み出してからは封印した。本人にとっては黒歴史みたいで、今も露骨に嫌そうな顔を見せる。

「悠貴は恋愛経験があるから軽く言えるんだよ」

綾太はすねたように唇を尖らせた。

「まあな」

余裕綽々に見えるように肩をすくめる。実は楓に相談を受けたとき、頼られたくてキスもセックスも経験済みとウソをついてしまったのだ。綾太にも伝わり、すっかり信じこんでいる。

「僕だって考えてないわけじゃない。もうちょっと時間が欲しいんだよ」

「そっか。なにかあったら相談に乗るぞ」

「やだよ。楓と仲がいいお前に聞いたらカンニングしてるみたいじゃん」

変に真面目だと、心の中でため息をつく。この調子じゃ、しばらくは愚痴とノロケに付き合うことになりそうだ。

通学路から外れ、住宅地に入る。さらに歩くと色あせた瓦屋根の建物が見えてくる。正面玄関にかかった紺色ののれんには白抜きの温泉マーク。銭湯だ。

のれんをくぐり、券売機で入浴券を買う。夕方になると利用客も多くて、部活帰りなのか『蹴球』とか『籠球』の文字入りバッグを持ったやつも何人か見かけた。

脱衣所でシャツを脱ぎ、ズボンはトランクスごと脱いでロッカーに入れる。どうせ着直すし、畳むのは面倒くさい。生まれたままの姿になり、カギつきのバンドを左腕につけて準備完了だ。

綾太はわざわざ服を軽く畳んでいたのも、まだボクサーブリーフ姿だ。腰ゴムにスポーツメーカーのロゴ。裾や前あわせの部分に蛍光色のラインの入ったものだ。

剣道部は室内競技なので、野球部みたいに真っ黒に日焼けしない。でも外で走りこみがあるから、二の腕や膝から先、そして首回りが体操服型にほんのりと焼けている。

そして体が小さい分、そっちの成長も遅いようで股間はつるつるだ。生えているものだって俺より一回り細い。

「何？」

視線に気づいた綾太が俺をにらむ。

「お前、まだチン毛生えてねえんだな」

「いや生えてるって。ほら、よく見ろよ」

手でチンコを隠し、腰を突きだす。しゃがんで根元を観察してみると、なるほど波打った細かい毛が数本だけ生えていた。

「こんなの生えてるって言わねえよ。俺くらいにならないとな」

俺の陰毛は良い感じに成長していた。大人みたいにジャングルではないけれど、雑木林くらいはある。

腕を組み、腰を横に振ってブラブラさせると、綾太は「うっさい」とローキックをしてきた。運動部なだけあって、かなり痛かった。

格子模様の磨りガラスがはめこまれたアルミ戸を動かすと、カラカラと小気味よい音が響く。そして一步、浴室に入ると湿気が体を包みこんだ。

浴室は白のタイル貼りで左手と奥に浴槽が二つ。右手には高い壁があり、等間隔で丸い鏡とシャワーが並ぶ。洗い場には木製の椅子と、有名な黄色いプラスチックの桶のセット。その上部は吹き抜けになっていて、向こう側は――。想像すると体が反応してしまうので頭を振って邪念を追い出す。

銭湯は結構好きだ。

大きなお風呂はプールみたいでテンションが上がるし、手足を伸ばして体を浮かべる

のは気持ちいい。

洗い場で体を洗う。綾太は目的のものを前に気が急いでいるのか、ボディソープを泡立てもせずにこすりつけ、ざっとシャワーで流すと奥の湯船に向かう。いつものことなので俺はゆっくり後を追った。

突き当たりの浴槽に入ると、綾太は肩までお湯に浸かりつつ壁を見上げていた。

そこには大きな画がある。葛飾北斎の富嶽三十六景の一つ『神奈川沖浪裏』なみうらだ。富士山をバックに波に揉まれる船が描かれた、誰でも一度は見たことがある有名な浮世絵だ。

縦は天井の梁ギリギリまで、横は女湯にまで続く。しかもただの絵じゃない。一センチ四方のタイルを大量に使って描かれた、モザイク画なのだ。

「何度見てもすげえよな」

タイルの一つ一つは単色なのに、集まることで綺麗な画になっている。

「うん」

初めは座って画を眺めていたが、すぐに我慢できなくなったのか立ち上がった。ざばざばと湯を蹴りながら横に移動する。見るのに集中しすぎて他の人に無遠慮に近づき、怪訝な顔をされても気づかない。

そして仕切りの壁にたどり着くと、背伸びをして続きを見ようとす。

「りよーたー」

「ん？ ああ、わかってる」

壁の近くで背伸びをする姿は不審者そのものだ。それくらいでぞける高さではないけれど、一応、注意はしておく。

毎週金曜日の放課後、俺たちは銭湯に行く。小学校の頃からの習慣で、行かないと体の調子がおかしくなってしまうほどだ。通学路にはいくつも銭湯があるが、綾太がモザイク画にハマってからはずっとここに通っている。

綾太は何度も往復して画を見ていた。ほぼ毎週来ているのに飽きないのかと聞いてみると、意外な所に意外な色が置かれていたり、見る度に新しい発見があるらしい。

理解はできないけれど邪魔をしちゃ悪い。堪能しきるまで俺はお湯に浸かってゆっくりする。浴槽の縁を枕にして体を浮かした。

「ふー」

いいお湯だなあ。

それにしても綾太と楓は大丈夫なんだろうか。

時間が欲しいと言ったけど、あいつが男が好きって話をしたことがない。オナニーも女の人でしてる。一緒にアダルト動画を見たときに、勃起してたから確かだ。

今まで恋愛対象が女だった人が、急に男も好きになれるのか。アニメとか漫画ならま

だしも、現実じゃ聞いたことがない。

そもそも、人を好きになるってなんだろう？

俺は人に恋したことも、(悔しいけど) 恋されたこともない。だから彼女がいる長島に聞いてみた。そしたら相手とセックスしたくなること、つまり恋とは勃起なんだと偉そうに言われた。

なるほどわかりやすい。その場では納得したけど、よく考えるとおかしい。だってエロ動画を見たら相手に恋してなくても勃つかからだ。

じゃあ恋とは？ 相手を好きになるってことはわかるけど、『好き』にはたくさん種類がある。

例えば俺は綾太が好きだ。でもこの気持ちは恋じゃない。

楓だって綾太が好きだ。けど恋してる。

恋はすぐく強い気持ちだ。だからって楓の方が綾太を好きだと言われるとしやくぜん 釈然としない。俺だって楓に負けないくらい好きだから。

ただ俺と楓の好きには決定的な違いがある。楓は綾太を思うと勃起する。それを聞いたとき、なぜか負けた気がした。悔しくて綾太でオナニーできないか試してみたが、ピクリともチンコは反応しなかった。

……あれ？ ということは恋は勃起するほど好き。つまり恋＝勃起となり長島の説は

正しいことになる。

いや、でも。まだ違和感があった。理由を考えるが言葉にできず、思考が頭の中でグルグルと渦を巻く。勃起のことばかり考えていたらムラムラしてきた。綾太はまだ絵を見ていたので俺は一人、タオルで股間を隠しつつ冷たいシャワーを浴びに行った。

□ ■ □ □ 3章 □ ■ □ □

過ごしやすかった時期は一週間も続かず、七月になった瞬間に夏がやってきた。

「うへー、蒸し風呂だ」

部室に入った瞬間、強烈な熱気に包まれて汗がふきだす。北向きの特別棟は西日が差さない代わりに湿気がひどい。空調のない廊下よりも不快指数が高いんじゃないだろうか。

急いでエアコンのスイッチを入れるがなかなか始動しない。椅子を持ってきて正面に陣取り、今か今かと風を待つ。ようやく出てきた冷風を浴びると、やっと生きた心地がした。

「あー、極楽ー」

窓は閉め切っているので、運動部の声はもう聞こえない。しかし真上から吹奏楽のホルン、チューバの低音が建物を伝って響いてくる。吹奏楽部も七月の終わりにコンクールの予選があるので音色にも気合いが混じる。

「よし、やるか」

その音に奮起され、ノートパソコンの新聞編集ソフトを起動する。今日で六月中に行われた予選結果をまとめてしまいたい。

号外のサイズはA3の両面印刷。紙面はかなりの広さに思えるが運動部は二十近くあるし、全員の結果を載せるルールがあった。成績で掲載、不掲載を分けるのは不公平だかららしい。

「楓ー、バドミントンは？」

「えっと、ちょっと待って下さいね。ここにメモして……あっ、あった。これですー」取材メモをもらい、スコアを打ちこむ。男子バドミントン部は全員が地区予選敗退なので、裏面に『バドミントン部 シングル地区予選（会場…みきのフィールド）大西0―3 須山』という風に試合結果を載せ、数行の解説を書いて終わりだ。

自然と紙面は裏から埋まっていく。今の様子だと今年も去年と同じく、入谷先輩が一面を飾ることになる。写真、見出し、前文、本文のレイアウトだけを決めておく。

「んー」

作業が一段落したのか楓が体を伸ばす。古い事務椅子の背もたれがギシギシと音を立てた。

「せんぱーい、ちょっと相談しても良いですか？」

「いいぞ。こっちももう終わるし」

まだ終わっていないがパソコンを閉じ、横にずらして向き直る。楓は申し訳なさそうに話し始めた。

「日曜に長谷部先輩とデートに行っただんですよ」

「ああ、前に話してたやつか。イオンモールだっけ」

近場でデートといえれば最初に浮かぶ場所だ。服屋や飲食店、ゲーセンにシネコンもあるのでやることには困らないし、無料のシャトルバスも出ているから学生にはありがたい。

「はい。クレープ屋さんがオープンしたから食べてみたくなって。僕はパイマンゴーで先輩はキャラメルバナナ」

バナナが好きな綾太らしいチョイスだ。そこからてつきり味の感想になるのかと思ったら、意外な方向に話が進んだ。

「それですね。クレープを店員さんから受け取るとき、先輩がどうしたと思います。背伸びして両手で受け取ったんですよっ」

興奮気味な楓と違い、俺は真顔になる。

「もう、メッチャクチャ可愛いかったですよね！ 写真撮っておけば良かったです。あとですね。美味しかったみたいですがすぐに食べ終わっちゃって。僕がまだ半分も残って

るのに気づいたら『あ、ごめん』って。それを頬にホイップつけて言うんですよ！
こっちは写真撮ったんです。見ます？」

「いや、いい」

俺は綾太にそういうのは求めてない。嬉しそうに楓は話すが、そこから話すんだ、と不思議に思った。デートのメインに映画をオススメしたのは俺だ。

「それで映画は面白かったのか？」

「……うーん」

表情が一気に曇る。

「先輩、午前に部活あったから疲れてたんでしょうね」

「ああ。なるほど。もしかして恋愛映画？」

楓はため息交じりに「はい」と答える。

「あいつ、その手の映画に興味ないのになあ」

好きなのはアクションものだ。特にスターウォーズが一番のお気に入りで、エピソード1のダースモール戦での残心について熱く語られたこともある。だから新作のアメコミヒーロー映画をオススメしたのに。

「変えましようって言うってたんですけど聞かなくなっちゃって。気をつかってくれたんでしょうね。僕は先輩と見られれば何だっていいのに」

「……で？」

さりげないノロケを受け流して、続きを促す。

「まあ謝られました。でも後が問題で。勢いのまま部活優先にしてることまで口にしちゃって……」

冷えた空気を想像して、思わずエアコンの風速を弱める。

「買い物してるうちに雰囲気は良くなりましたけどね。クレープを受け取る姿も可愛かったし、先輩も楽しそうだった。……だからちよつと期待して、帰りに公園に寄ったんですよ。人もいないし、せめて手くらいはつないでくれないかなって」

「でも、ダメだったと」

「はい。あーもー。なんであんなに奥手なんですかね」

机に突っ伏す。楓は自分が可愛いと自覚しているタイプだ。綾太と『お試し』が始まるとすぐに落とせると豪語していた。なのに上手いはず苛立ちを覚えている。

「ちゃんとデートしてるじゃん」

少し失敗したとしてもデートはデートだ。それに二人は毎日アプリで会話をしているらしい。細かな内容までは把握していないが、中身のあるものではない。恋人との会話って何でも楽しいものだと思う。多分、きつと、おそらく。

「もっと近づきたいんですよ。手だっつなきたいし、ハグもしたい。……その次だっ

て」

あーあ、とため息をつく。

「もしかして、長谷部先輩って罪悪感で僕と付き合ってくれてるのかな」

「それはねえよ。綾太は確かに奥手だけど、答えが出てるのにズルズル引き延ばす奴じゃない」

「そう……なのかな」

「絶対そうだって。親友の俺が言うんだから間違いない」

綾太のことならなんでも知っている。自信を持って断言した。

「もう少し待ってやれよ。あいつだって色々と考えてるんだから」

恋人ができること自体が初めてで、男を恋愛対象として見ていなかった。なのに、いきなり上手く立ち回れるほど綾太は器用じゃない。そうでなければ、とつくに恋人がいるはずだ。

「でも……もう時間がないんです」

「時間？ 終業式のことか？」

変な言い方だ。夏休みが始まったら毎日会えるじゃないか。やろうと思えば相手の家に泊まることも。——いけない想像をしかけて顔を横に振った。

「違います。花火大会ですよ」

「ああ、なるほど」

毎年、八月最初の日曜日に河川敷で行われる『たかもりHANABI』のことだ。近くの神社ではたくさんの屋台が出店し、商店街も夜までお店を出す。この町における夏唯一の、一年を通して最大イベントだ。

「僕、長谷部先輩と一緒に花火を見たいんです。後輩としてじゃなく、恋人として」
楓は決意を表すように拳を握る。

「うーん。焦るのはわかるけど、あんまりガツつくのはよそうぜ。綾太だって引いちまうよ」

「でもなー。ガツガツ行かないと、ずっと結論出してくれなさそうじゃないですか」

「一理ある。あいつ、お堅いなあ」

そもそも告白の返事だって、俺がせつつかないと永遠に悩み続けていただろう。

「でも、あいつの頭の中、今は総体のことでいっぱいだよ。県大会初出場だし。そもそも県大会は夏休み直後、花火大会はその後。ほら、県大会が終わってからでも時間はあ
るじゃん」

「……はーい」

楓は渋々といった様子だが納得してくれた。

「大丈夫だって。俺にできることならなんでも協力するから」

「ほんとですか？」

「おう」

胸を叩いて見せる。可愛い後輩のためなら一肌脱ぐくらいなんてことない。

「えっと、どうしようかな。でも先輩だったら」

「何かあるならハッキリ言えよ」

「……キス」

「え？」

「……キスの練習を、したいです」

「はあ!? キスう? キスってその……あの、唇と唇をくっつける?」

「当たり前でしょ。それ以外に何があるっていうんですか?」

楓も恥ずかしいのか声が大きくなった。頬もほんのりと赤らんでいる。

「す、すまん。けど、キスの練習って……本気か?」

動揺して変な質問をしてしまった。俺だってキスくらい知っている。でもキスって好きな人とするものだ。そもそも楓がキスしたことがないのが意外だった。

「ファーストキスは綾太のために取っておけよ」

「いいえ、練習はキスに入らないです。部活と同じですよ。練習は練習であって、本番の大会じゃないと記録にならないじゃないですか」

なるほどと思いかけたがすぐに正気に戻った。スポーツの記録と同じと考えるのは何かおかしい。初めてのキスは一度しかできないものなのに、大切な人としたくないのだろうか。待てよ。もしかして俺がキスを特別なものと考えすぎているのか？

「僕だって変な頼みなのはわかってます。……ただ、下手なせいで長谷部先輩に違和感を持たれたら、やだなあって」

自嘲気味な笑顔を見せる。ふざけているんじゃない。真剣に悩んでいるんだ。

「それに先輩は経験済みじゃないですか。僕がいいんだから構わないでしょう？」

「まあ、な」

他のことならなんでもする。ただ、キスだけは困る。ファーストキスは大事な時のために残しておきたい。

渋っていると楓は肩を落としたり。

「……すみません。変なことを言っちゃって」

なんでも協力すると言った手前、罪悪感がチクチクと胸を刺す。楓は俺しか頼れる人がいないのに断ってしまっているのか。

「……わかったよ」

頭を切り替えよう。練習は練習なんだ。だから本当のキスじゃない。

それに正直、どんなものか興味があった。数に入らないのなら体験してみたい。誰と

でも良い訳じゃないけど、楓となら悪い気はしなかった。

「ほら、早くしようぜ」

「は、はい。じゃあ、椅子に座ってもらっていいですか？」

椅子に座ると、俺の顔の位置が少し楓より低くなる。身長差を再現しているようだ。

「じゃあ、しますね」

「おう」

さすがに緊張しているのか表情がこわばっていた。背中を丸め、目を閉じ、ゆっくりと顔を近づける。人の顔が目の前まで接近するのは初めてだ。俺も思わず目をつむってしまう。

そして――。

鼻がぶつかった。

「ん？」

目を開けると鼻頭がキスをしていた。俺たちは顔を見合わせ、同時に吹き出す。

「ぶっ……はははははは」

「先輩、笑いすぎっ……ふひゃ、はははっ」

緊張の反動で笑いが止まらない。まっすぐ顔を近づけたら鼻がぶつかるのは当たり前じゃないか。

「は、はらいてっ……ぶっははは！」

座っていられず床に転がる。俺たちは数分笑い続け、二人そろって涙目になった。

「あー、良かった。綾太先輩とこうなってたら雰囲気ぶち壊しでしたよ」

顔を真っ赤にして真面目に謝る綾太の姿が浮かぶ。

「よーし。それじゃもう一回いきませぬ」

失敗でリラックスしたのか、表情にも余裕が見えた。両肩に手を置き、顔を傾けて近づける。俺は息を止め、唇が触れるのを待った。

唇に柔らかいものが触れ、すぐに離れる。

目を開くと、ただ楓の顔があった。この瞬間まで、キスをしたら自分を取り巻く世界がぱあっと変わると思っていたのに、何も変わっていない。ここは放課後の部室で、聞こえるのはエアコンから出る風の音だけ。あまりにもアッサリすぎて拍子抜けしてしまう。

まつげの長い目がゆっくりと開き、楓がはにかむ。

「なんで笑うんだよ」

「いや、だって顔が近いじゃないですか」

「当たり前だろ。キスしたんだから」

なんだかおかしい。どうでもいい会話なのに、心をくすぐられているように小っ恥ず

かしい。初めての感覚に言葉数が多くなる。

「結構良かったぞ。初めてにしては悪くないんじゃないか」

「えへへ、嬉しいです」

「ただ、もうちょつとゆつくりした方がいいんじゃないかな。あつさりすぎると感触を
楽しめないし」

「なるほど。こうですか？」

すつと顔を近づけ、唇が重なる。壊れ物に触るような動きは消え、お互いの唇が長く
触れあった。今度は温もりを感じる余裕すらあった。ほんのわずかな場所なのに、柔ら
かさと温かさに意識が引きこまれる。衝動的に唇を押しつけると、奥に前歯を感じた。

「ふえ、ふえんふあい。ふよいつす」

「え？ あつ、すまん」

湿り気で張りついた唇がゆつくりと剥がれていく。すぐに温もりが消え、代わりに心
の底で小さな寂しさが生まれた。楓も同じなのか、互いの息がかかる距離で俺に尋ねる。

「先輩？」

「うん」

引き寄せられるように、またキスをする。

「ん……」

気持ち良くて、鼻から変な声が漏れる。その瞬間、肩に置かれた細い手に力が入った。「どうですか？」

「あ、うん……いいと思う」

キスつてすごい。

脱力して椅子に体を預ける。腰が抜けていた。もし座っていなければ床にへたりこんでいたかもしれない。

楓は自分の唇に触れ、人差し指を横に滑らせる。ほんのわずかな動きになぜか色気を感じてぞくりと寒気がした。腰の奥がきゅつとして股間に熱が――。

「な、なかなか良かったぜ！ あー！ もうこんな時間じゃん！ 今日はこれくらいにしとこうぜ！」

立ち上がり、荷物を鞆につめる。危なかった。何が危ないのかわからないけど、あのままだと本当に危なかった。そんな甘い空気が部屋には漂っている。

早足で部屋から出てカギを閉める。明日には消えていることを願いつつ。

カギを職員室に返し、昇降口で靴を履き替える。外の暑さに身を置くと、キスでぼやけていた頭が鮮明になった。同時にさっきのことは忘れようと決意する。

「あ、先輩」

いつも別れる交差点にさしかかった時、今まで黙っていた楓が頭を下げる。

「今日はありがとうございました。次もよろしくお願いします」

「……次？」

「はい。『今日はこれくらい』ってことは次もあるってことですよね？ 僕、頑張って上手くなりますから！ ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願ひします！」

不安が払拭されたからか、楓の笑顔は明るい。そんな顔をされたら何も言えなくなる。こうして俺たちはキスの練習を続けることになってしまった。

□ ■ □ 4章 □ ■ □

日曜日、綾太から遊びに誘われた。

県大会出場が決まってから、ずっと練習、練習、練習だったから一緒に遊びに行くのは久しぶりだ。しかもあいつから声をかけてくるなんて珍しい。嬉しくて、少し早めに家を出た。

待ち合わせは近くのJRの駅前だ。住宅地の中にあり、上下線をまたぐ渡り廊下があるだけの無人駅。

集合時間ちょうどに到着すると、すでに綾太は改札前のベンチに座っていた。スマホをいじりながら足をぶらぶらと揺らしている。

襟に黒と赤のラインが入った白のポロシャツにキャメルのハーフパンツ。頭には野球帽を被っている。ファッションに詳しいわけじゃないけれど、子供っぽい格好なのはわかる。ただ、すごく似合っていた。

「りょうたー、おっーす！」

「おっすー」

綾太は俺に手を上げ返し、白い歯を見せる。部活中は固い顔をするが、リラックスしているときと良く笑う。

「悠貴が遅刻しないとか珍しいね」

綾太はいつも十分前には集合場所にいる。時間通りに到着すればいいと考えている俺は、綾太的には遅刻の常習犯だ。

「大会が近いのに遊んでいいのか？」

ちよつと嫌味っぽく言ってみる。最近は部活後も自主練をするからと河川敷に行ってしまうし、たまに下校が一緒になっても楓が優先だ。七月に入ってから金曜の銭湯すらすっぽかされていた。

「今日も練習するつもりだったよ。けど部長に怒られちゃって。道具は大事にしろって」

「なんだっけ？ 先革？ だっけ？」

「あと柄革つかがわね。そろそろ交換時期だっけわかってたんだけど、後回しにしてたんだ。でも試合直前に変えると調子狂うし、試合前の検量ではじかれるから交換しろって」

竹刀は一本の棒ではなく、分割した竹を組み合わせたものだ。『先革』というのは刀身の先端にかぶせるカバー。『柄革』は文字通り、持ち手を覆う革だ。

電車に乗り、拆川を渡って市の中心街で降りる。駅前が一番高い建物は元・地方百貨店のもので、スーパーやフィットネスクラブ、百円ショップとファミレス、そして個人病院が集まったフロアがある。

休日なのに周囲には人影が少ない。駅から直結の通路があるので外に歩く必要がないのもあるが、高守市の人は出かけるときはみんな自家用車を使うからだ。電車も座席に寝転べるくらい空いていた。

「こっち」

綾太はスマホを片手に駅舎から出る。追って日向に入ると冷房で冷えていた体を日光が熱し、髪の毛が縮れる感覚すらした。

少し迷ってから、元・百貨店と隣のビルの間に入る。

立体駐車場に入場待ちの車の列を追い抜き、さらに進むと、なにやら場違いな建物が見えてきた。瓦敷きの木造家で、入口上には『上泉武道具』と濃い木目の板に力強く筆で書かれた看板が掲げられている。

「ここか？」

「うん、そうみたい」

綾太は何度もスマホの画面と実物を見比べる。よく見ると武具店の部分だけ元百貨店の建物が凹んでいた。相当古いお店だ。

「なんか、怪しくね？」

「そう？ 隠し要素みたいで格好良いじゃん。伝説の武器とか売ってそう」

そう言うのと躊躇することなくアルミ戸を開き、中に入ってしまった。外で待っているわけにも行かず、俺も後を追った。

店内はオシャレのかけらもなかった。教室くらいの室内は天井近くまであるスチール製の棚が並び、面や胴、小手が陳列されている。BGMはラジオ放送で、パーソナリティが軽快な語り口で嫁姑トラブルの相談に答えていた。

「あれ？」

違和感を覚えて鼻をならす。防具がたくさんあるのに、凝縮された汗と消臭スプレアの混じった匂いがしない。逆にハムのような良い香りがする。奥で料理でもしているんだろうか。

綾太はすでに先革のコナーを見つけていて、複数の商品を手に取っていた。

「うーん、ごめん。選ぶのちよつと時間かかりそう」

「おっけ。適当に見てるわ」

面白いものはないか、店内を探検する。まずは銅のコナーだ。

どうせ紺や黒みたいな暗い色ばかりだろう。だが予想に反し、棚に並ぶ銅はとても色彩豊かだった。お腹を守る半球の色が赤・青やエメラルドグリーン、中には大理石みた

いな模様入りに加え、魚のエイの革を使ったものまであった。

さらにショーケースには金箔を張ったド派手なものまである。値段は引くほど高く、試合相手がこれを着ていたら打ちこむのは躊躇する。心理的な効果を狙った装備なのかもしれない。

この調子なら戦国武将の兜みたいなの、三日月や角がついたものがあるかもしれない。期待して探してみたが、残念ながら見つからなかった。

小手のコーナーに入ると、わずかに漂っていたハムの匂いが強まる。どうやら小手から出ていようだ。あとで綾太に聞いてみると、燻製された革が使われているからと教えてくれた。

続けて刀のショーケースを見つけた。中には本物の刀身が飾られている。顔を近づけると波紋がよく見えた。角度を変えると照明を反射してキラリと光る。

「すげー……カッコいい」

アニメとは違って実物はヒヤリとした重さがあつて、股間が少し縮むのを感じた。

「おい、来いよ。刀あるぞ。——って？」

どこから現れたのか、綾太の隣におじいさんがいた。

茶色の和服に胸元まで伸びた白いひげ、長い白髪をポニーテールみたいに頭の後ろでくくっている。時代劇に出てきそうな格好だ。綾太はその人に両方の手のひらを見せて

いる。

「何やってんの？ そのじいちゃん誰？」

「悠貴、失礼だぞ」

「……その人は誰ですか？」

低い声で注意され、俺は渋々従う。剣道をやっているからか、礼儀には厳しい。

「店長さんだよ。マメを見てもらってるんだ」

前半はわかったけれど、後半はよくわからない。

店長は綾太の手を取り、薬指と小指の付け根にできた竹刀マメを親指の腹でそつと撫でる。

「うんうん。良いさわり心地だ。少し割引してあげよう」

ゲームのイベントみたいなセリフと共に、シワシワの顔をさらにシワシワにする。痩せているわりに声は低く、ますます超然とした雰囲気が強まった。

「長谷部くんだったね。入谷くんが部長なだけあって、後輩も有望だね」

「い、いえ。そんなこと。恐縮です……」

「私も県大会を見に行くんだ。君たちの活躍を楽しみにしているよ」

「はい、頑張ります」

買い物を済ませて外に出ると、緊張していたのか綾太は長い息をはいた。

「お店も変だけど、店長も変な人だったな」

「また失礼なこと言ってる。あの人は範士はんしっていうすごい称号を持ってるんだぞ。もう引退されているけど、マメを見ただけで実力がわかるほどなんだ」

「ふーん。確かに普通っぽくなかったもんな」

コスプレみたいだ、という感想は怒られそうなのでやめておいた。

「だろ？ 入谷先輩もマメを褒めてもらった後、全国大会に出場できたんだ。もしかして僕も——」

両手を握りしめて興奮する綾太は置いておき、俺たちは駅とは別の方角に向かう。今日の買い物はいいで、むしろ今からが本番だ。

片側二車線の幹線道路に出て五分ほど歩くと、周囲に建物よりも広い駐車場を備えた五階建ての施設が現れる。大正時代にありそうな和洋折衷の木造建築で、見た目は旅館に近い。

道路脇に立つ看板には、『六嶽むたけの湯』の文字と温泉マーク。

最近できたばかりのスーパージョウ。綾太はずっとここに来たがっていた。

入ると広々としたホールが迎えてくれた。天井は吹き抜けで高く、梁に設置されたシ

ーリングファンがゆつくりと回る。天窓にはステンドグラスがはめこまれ、色づいた淡い光が温かみのある雰囲気を醸し出していた。

床は濃い茶色の板張り、椅子や机は籐トウを編んだラタン調に統一されて、レトロでオシャレだ。

銭湯の数倍の値段を支払い、男性フロアにエレベーターで上る。町中なので露天風呂はないが、代わりに塩サウナにハーブ湯、電気風呂に釜風呂、打たせ湯と盛りだくさんだ。

だけど綾太の目的は違う。脱衣所に来ると途端にソワソワし始め、荒く服を脱ぎ、早足で浴室に入る。そしてすぐに振り返り、入口上部の壁を見上げた。

そこには壁一面を使ったモザイク画があった。

『黄金富士』という作品で、名前の通りタイトルで黄金色の富士山が描かれていた。黄金と黒の二色の濃淡だけで雪化粧や、雲海のうねりが表現されている。日本史の資料集に載っていた、金屏風に描かれた水墨画を思いだす。

横は四メートル、高さは二メートルほど。タイトルは一センチの正方形だから、全部で八万枚も使った大作だ。間接照明で照らされ、少し離れると絵にしか見えない。

綾太はさっそく集中モードに入ってしまった。前も隠さず、左右に歩いて色んな角度から鑑賞する。人とぶつかりそうになったので慌てて腕を引いた。

「先に体洗ってるな」

「うん」

生返事はいつものことなので一人で洗い場に向かう。モザイク画はこのスーパー銭湯のウリの一つで、浴室ごとにテーマの違う富士山の画が飾られている。男湯に三つ、女湯に三つ。だから『六嶽^{がく}』なのだ。

一番近くの洗い場に座り、横目で綾太の様子をうかがいつつ体を洗う。以前、ちょっと目を離れたらのぼせてしまったことがあるので注意しておく。

タイル画を初めて見たとき、俺はドット絵みたいだと思った。

ドット絵は古いゲームなどで使われる、ドット（点）で作られた絵のことだ。俺はSwitchのでやったファミコンのマリオくらいしか知らなかったけど、綾太はオタクみたいに詳しい。

前に見せてもらったファイナルファンタジー6の『まじん』っていうボスモンスターは、点の集合とは思えないほど迫力があつた。

そして中には結構エッチなものもある。俺はメジュリー又派で、綾太はチャダルヌーク派だ。どっちがいいかが平行線になったので楓に聞いてみたら、ロマンシング・サガ3のフォルネウス（真）派だった。考えるまでもなく小さいから選んだだと、妙に納得した。

『本物は小さいのに影の姿を大きな化粧物にするなんて、コンプレックスをこじらせて
それで可愛いじゃないですか』

そう明るく言う楓もなかなかのものだと思う。

ゆっくり、ゆーっくりと体を洗う。それでも時間が余ったのでぼうっとしてみると、
ようやく綾太がやってきた。

「満足した？」

「うんっ」

興奮しているのか声が高く、鼻息も荒い。

「早くハーブ湯行こうっ」

さっと体を流すと、返事も聞かずに歩きだす。なんだか遊園地に来たみたいなたんし
ヨんだ。

ハーブ湯の画は富士をバックにシロサギが群れで飛ぶ姿を描いたものだ。綾太は端か
ら湯に入ると、鳥を数えるように視線を向けたまま反対側へと泳いでいく。

俺は手足を伸ばし、エメラルドグリーンの湯に体を浮かべた。ハーブの匂いが少し強
いけど、結構いいお湯だ。

綾太はモザイク画を見るだけじゃなく、自分でも作りたがっている。ただ実物はお金
もかかるし、場所も取る。だからスマホのアプリでドット絵を作っているのだ。

まだ下手だからとアカウントを教えてくれなかったけど、検索したらすぐに見つかった。脇の甘いところは綾太らしい。

ただ見つけたことは話していかないし、見ないようにもしている。俺の知らない人と楽しそうに交流している所に立ち入るのは無遠慮だと思ったからだ。

剣道では県大会に出場し、ドット絵も作り、さらに楓とも付き合っている。俺なら三人いらないとできないことを、忙しいと嘆きつつもこなしている。本人には絶対に言わないけれど、そんな綾太を密かに尊敬していた。

自分から様々なことに挑戦して、どんどん世界を広げている。たとえ背が伸びなくても、綾太は確実にビッグになっていく。

ただ同時に負けられないって気持ちもあった。何もしていないと置いて行かれてしまう。一応、身長は上だけど成長期の二十センチなんかあつという間にひっくり返る。

だから勉強だけはちゃんとしていた。この前の期末テストじゃ全ての科目で勝った。対抗心を持っていると悟られたくなくて、全然勉強していないと嘘をついたけど。

三つの湯にゆったり浸かり、最後にサウナに入る。塩サウナや遠赤外線サウナと特殊なものがあるのか。ドライサウナには俺たちしかなかった。

モザイク画を堪能しきった綾太は目がキラキラになって、少しでも感想を聞くと三分は熱く語りだす。だからサウナでリセットしてもらおうのだ。

初めこそ興奮がおさまらず、貧乏揺すりをしていた。けれど、だからだとゲームとかアニメの話をしていたら、落ち着きを取り戻していった。喉も渴いてきたし、そろそろ出ようかなと思っただけの時だ。急に綾太の声のトーンが真面目なものに変わった。

「あのさ。悠貴って最近、楓と話した？」

「もちろん。昨日も一緒にサッカー部の取材に行ってきたしな」

「そっか」

「なんだよ気持ち悪いな。聞きたいことがあるんだろ？」

歯切れの悪さに俺は苛立った声を出してしまった。

「最近、あいつの様子がおかしいと感じたことある？」

「いや、別に」

心当たりはあるが平静を装う。

「そっかー。僕の勘違いなのかなー」

「一人で納得すんなよ」

「それがさ。火曜くらいから、距離を取りだしたんだ。前はすぐに手をつなごうとしてきたり、抱きついてきたりしてたのに、急にしなくなった」

「遠慮するようになったんじゃないの？ お前だって困ってたんだろ」

「困ってただけさ。いきなり態度を変えられると……調子狂っちゃうんだよ。何かあつ

たか聞いても『なんでもないです』の一点張りだし」

「俺に聞くのはカンニングなんじゃなかったっけ？」

以前、言った言葉をそっくりそのまま返すと、綾太は苛立ったように頭をガシガシと叩いた。汗が飛び、電球色の照明に照らされてキラキラと光る。

「ヒントくらいは欲しいんだ」

原因が俺だなんて夢にも思っていないようだ。楓とキスの練習を始めたのが月曜日。距離を取りだしたのが火曜日。完全に辻褄があっている。

あれ以来、毎日のようにキスの練習をしていた。昨日も取材が終わり、帰りに部室に寄った途端に……。二人きりになるとお構いなしだ。そして一回の長さや、回数も増えていた。けれど何でもすると宣言した手前、拒否もできない。それに……。気持ち良いし。柔らかい唇の感触を思い出し、腰にかけてタオルの下に血が集まる。気をそらそうと会話を続けた。

「もしかして、熱が冷めたとか？」

綾太の顔がこわばり、慌てて訂正する。血が下半身に集まったせいで脳がバカになっていた。

「じよ、冗談だって。本気にするなよ」

だが深刻に受け取ってしまったのか、あぐらをかき、薬指のつけ根にできた竹刀マメ

をいじる。

「……僕って奥手なのかな」

「うん」

「即答なの？」

「だってそうだろう。付き合って一ヶ月なのに手をつないだことがないとか」

そもそも綾太がもっと積極的だったらこんなことにはならなかった。責任転嫁だとわかっていても考えずにはいられない。

「……お前の初めての彼女とはどうだったの？」

「えーっと、最初のデートの時には手をつないだし、二回目には別れ際にキスしたな」
恋愛経験者というウソをつくために、架空のエピソードは準備していた。ネットには俺たちの年齢での恋愛体験が色んなサイトで読める。そこから俺好みのエピソードを選んで、ある程度のストーリーは作っていた。

「そんなに早く!?!」

綾太はびっくりするほど大きな声を出した。あれ？ 早いんだ。

「……やっぱり気持ちいいの？」

「まあな。俺もするまでは大したことないと思ってた。でも実際にしたら、腰が抜けそうになったぜ。あれをしないのは損してる」

ちよつと具体的に言い過ぎた。クラスの友達だったら、もつと詳しく聞かせろと食いついてくる。しかし綾太は黙りこみ、手のマメをいじり続けた。

「楓とキスしたいと思わないの？」

「そりゃ………したいよ。想像したこともあるし」

さりげなく俺側の膝を立てて股間を隠す。勃起してしまったのだろう。

少しでも性的な話をする、俺たちの体はすかさず反応する。でも真剣に話したい時は邪魔だ。誰かが勃っていると無性にからかいたくなる。こういうときスイッチをオフにできたらいいのに。

「じゃあ、なんでまだ『お試し』なんだ？」

キスをしたくらい好きなのに付き合わないなんて、理解できない。

「うーん、なんて言えばいいのかな」

綾太は腕を組み、しばらくの間うなっていたが、サウナのガラス扉の向こうに見える黄金富士を指さす。

「あれだよ。僕の心はあんな感じ」

「……エロいってこと？」

「そっちのモザイクじゃないよバカ」

肩を軽く殴られる。汗で濡れているせいで、おかしいくらい張りのある音が鳴った。

「楓への気持ちは種類がたくさんあるんだ。一緒にいると楽しいオレンジだったり、後輩を可愛く感じる青だったり、安心できる緑だったり……ピンクだったりする。その全てが『楓が好き』って気持ちなんだ」

モザイク画のハートを想像する。全体はピンク色だけど中央にある『楓LOVE』の文字はオレンジや青、緑の派手なグラデーション。

「告白される前は『好き』の種類は少なくて単純だった。可愛い後輩としか思ってたから。でも告白されたら、一気に『好き』の色が増えた。今だってあいつへの気持ちは大きくなり続けている。でも恋人として好きなのはまだわかんない。大きくなりすぎて、よく見えないんだ。僕の説明、分かる？」

タイトルが少なければ色の数は少なく、小さいから全体が一目で分かる。ただ何倍、何十倍にも増えると、離れないと何を描いているかが判別できない、ということか。

「なんとなく」

「そっか。良かった」

安心したのか綾太は長い息を長く。

「でき。悠貴って、セ……セックスしたことあるの？」

恥ずかしさを隠しきれず、声が裏返る。どうやら楓は俺の恋愛経験について細かくは伝えていないようだ。

「おう」

「え？ マジで？ 初耳なんだけど。誰と？」

「聞かれなかつたから。ネットで遠距離恋愛してた子」

同じ学校だとウソがバレやすいので、架空の彼女は綾太と接点のないように設定してある。

「ちよつと待って。二回目でキスしたんだよね？ じゃあ、もしかして、三回目で？」

「まあな」

設定では五回目だったが変更だ。さすがに早いと思うが、話の腰を折りたくない。

「そう……なんだ」

綾太は肩を落とす。

「遠距離恋愛だったし、俺の場合は特別だぞ。そもそも今回は男同士じゃん」

自分でもズルいと思う。経験済みだと上からモノを言っているのに深い部分になると、わからないと逃げている。

「だよな」

セックスについて話すとしても勃起してしまふ。いつもは下ネタに変えて発散している恥ずかしさも腰に集まり、チンコを膨らませる。でも、抜きたい！ という衝動はなく、半勃起で止まってしまう。

腰のタオルから先端が顔を出しそうになり、俺も膝を立てて股間を隠した。勃起しあっているのに真剣な話をしているのが、なんだかおかしい。

綾太は目を閉じ、何か考えていた。楓とのセックスを妄想しているのだろうか。

「やっぱりダメだ。まだ考えられないや」

「けどキスはできるだろ」

「うーん、できると思うし、したいよ。でも目の前にいるとダメなんだ。してもいいのかな、俺でいいのかなって躊躇しちゃう。嫌がっていると誤解されるのも怖い」

「じゃあどうすんだよ？ 練習でもすんのか？」

楓も同じ気持ちだよ、とはさすがに言えない。からかい半分で聞いてみる。

「練習？ 誰と？」

不思議そうに俺の顔を見ると、即座に「いやいやいや！」と大きく手を振った。

「お前となんか絶対嫌だし！」

「馬鹿じゃねえの。こっちだって嫌だよ」

普通の反応に安心する。だよな。いくら親友でもキスの練習なんておかしいよな。なら相手が親友の恋人なんて、もっとおかしい。

明日、ちょうど楓の家に行くからハッキリと断ろう。もう止めようって。

「まあでも、イメトレはしておこうかな。イザという時に下手だったら格好悪いし」

「えっと………写真、いるか？」

「はあ？ いらないうって」

拒否してもすぐに目が泳ぎだす。

「……あるの？」

「たくさんあるぞ。取材の前にお互いに試し撮りするから」

「じゃあ……欲しい」

「オッケー」

「そのニヤケ顔止めないと殴るぞ」

「なんだよー。恥ずかしがんなよエロ綾太」

「ば、ばか！ そういうんじゃねえってば！」

叩くだけじゃなく蹴りまで入れられ、たまらずサウナから脱出した。

水風呂に飛びこみ綾太も続く。体が一気に冷え、チンコもあつという間に縮んでいく。

安心した。二人が悩んでいることは同じだったんだ。これなら、くつつくのも時間の

問題だ。もうしばらくは仲を取り持ってやろう。そう考えつつも、もどかしさも感じて

いた。

二人が付き合い始めた頃、俺は綾太と遊ぶ回数や一緒に帰る日が減る、くらいにしか考えていなかった。でも実際は俺も巻きこんで人間関係が変化している。綾太と恋愛話

をするなんて思いもしなかったし、楓とキスの練習なんて想像すらしなかった。

正直、この変化がしんどかった。だから早く正式に付き合いたい始めて落ち着いて欲しい。早く前みたいにも考えずに馬鹿なこととして遊びたかった。

「可愛い、かー」

帰り道、不意に綾太が呟いた。

「ん？」

「いや、楓が僕のことを話す時っていつもそうなんだよな。そこがなー」

頭の後ろで両手を組み、オレンジ色の空に浮かぶ山のシルエットを見つめる。

「可愛いって言われるのが違和感あるんだ。もしかして僕のことをヌイグルミみたいにしてるんじゃないかなーって。でも僕、先輩じゃん？ やっぱり格好良いつて言われたいんだ」

贅沢な悩みだと思うが、言われたい気持ちにはよく分かる。後輩から格好良いと言われると、自分が英雄になったかのように誇らしくなるから。

「あいつを見返してやるにはどうしたらいいんだろうなー」

俺は首をかしげた。

「簡単じゃん。格好いい所を実際に見せればいいんだよ」

「実際に？ どうやって？ 僕が何しても可愛いしか言わないのに」

「県大会」

「——あっ！」

「そういうこと。試合で大活躍すれば楓だってイチコロだぞ」

「そっか。そうだよね」

綾太は「氣勢、残心……」「やっぱ二本先取だよな……」とかブツブツと呟いていたが、ハツとすると俺の顔を見る。

「もしかして、そのために楓と取材に？」

「まあな」

「やるじゃん！ さっすが悠貴！ おーし！ 僕、頑張る。超頑張る！ すごいって言わせてやるぜ！」

両方の拳を高く突きあげる姿に苦笑しつつ、心の中で「世話が焼けるな」とため息をついた。

□ ■ □ 5章 □ ■ □

他人の部屋って匂いが違う。

綾太の部屋は剣道の匂いがするし、楓の部屋はレモネードみたいに爽やかだ。じゃあ俺の部屋はどんな匂いがするのだろうか。

楓の家は学校から歩いて十五分ほどの距離にある。

大きな一軒家で部屋も広いが家具は少ない。ただ隙間を大量のヌイグルミが埋めているので、むしろ圧迫感すら覚えるほどだ。イケア製のサメにトトロとかのジブリ系、そしてポケモンたちが並ぶ。ベッドの上にはピチュー、ソーナノ、タマンタにリオル……とベイビィポケモンばかりだ。

テレビの前には二人がけのローソファがあり、俺はそれに座り、ローテーブルに頬杖を突いてノートパソコンを見ていた。

七月も二週目に入ると、体育大会の地区予選の結果も大半が出そろおう。『千紫万紅』号外のメ切りは終業式前日の十九日なので編集作業を大急ぎで進めている。

今日は県大会出場を決めたバスケット部の記事に使う画像を選んでいた。

「ダメ。んー、ダメ。ダメだなあ。……うーん、微妙なやつばっか」

「そうですか？ これなんか迫力があるじゃないですか」

楓が抱えていたフライゴンの尻尾でジャンプボールの画像を尻尾さす。

「駄目だよ。対戦相手が真ん中に映ってる。被写体の主役が違う」

「あ、なるほど。そういう基準で選ぶんですね」

おそらくずっとベンチ近くにいたのだろう。コートチェンジした後はほとんどが味方の背中を写している。仕方がないので前半戦から探した。

次に二年生にカメラ係を頼んだ卓球部だ。『とにかく数を』とお願いしたが、果たして。ドキドキしながらフォルダを開くと二百枚の画像とメモファイルが現れる。メモには『数は打ったから当たりを見つけてくれ』と書かれていた。

こういうのが一番ありがたい。期待しつつ中身を確認するが、思ったより偏りが大きい。勝ち進んだ選手は多く、一回戦敗退だと数枚だけ。

アバウトな指示しかしていないから文句は言えない。ただ、選手ごとの枚数については伝えておいた方が良かった。撮った画像は部にも送ることになっていくからだ。しかし、あまり注文をつけると、勝手にまとめ役に認定されかねないから難しい。

残りの試合はどうしたもんかとうなっていると「そんなに悩まなくてもいいじゃない

ですか」と楓が呆れる。

「先輩って変な人ですよ。春号の時は部室にすらこなかったのに。夏号になったら、急にやる気になるなんて」

「やる気があるわけじゃねえよ。けど頼まれたからには、ちゃんとしたいんだ」

総体のしきり役は新聞部だけに所属、いわゆる専部の人が担当する。去年、入部したとき、専部は俺と三年の先輩しかいなかった。

その先輩も取材のしきり役になって、仕事の割り振りをした。みんなに気を遣えて、記事も丁寧に作るすごい人で、テスト前には勉強まで教えてもらった。そんな尊敬する人に『来年は頼んだぞ』と後を託されたら、やらないわけにはいかない。

「真面目ですよ。まあだから僕も助かってるんですけど」

「……どういう意味だよ。というか来年はお前が仕切るんだから。俺は今年で引退だから後は任せた」

「そう言いつつ手伝ってくれるのが佐倉先輩ですよ。頼りにしてますよー」
調子の良いことを言っただけで背中を叩いてきたので、軽くにらみかえす。

「そんなことより、先輩って写真撮るの上手いですよ」

楓はマウスを握り、剣道部のフォルダをダブルクリックする。だがすぐには表示されず、ロードを示すアイコンがぐるぐると回った。五百枚近い画像があるとプレビューが

出るにも時間がかかるのだ。

「ちよつと撮りすぎだと思えますけど」

「綾太もいたからな。格好良い写真を撮ってやりたかったんだ」

「えー、うっそだー。五分の一角が入谷先輩じゃないですか。長谷部先輩の写真五十枚しかないし」

「当たり前だろ。入谷部長は優勝候補なんだから。まあ、結果は準優勝だったけど」

マウスホイールを動かし、一覽をスクロールさせる。もちろん綾太の写真は全て楓のスマホに転送済みだ。

「あ、これなんかどうですか？」

指さしたのは二位決定戦で勝利を決めた直後、面を外した姿だった。いつもは柔和な先輩の表情が険しく、接戦の後を思わせる。

「うーん、顔しか写ってないんだよな。パッと見て剣道だとわからないのはちよつとな」

それに強面で怖い人みたいな印象を与えてしまう。試合中のものを選ぶと今度は楓が不満を口にした。

「顔見えないじゃないですか」

「前垂れでわかるからいいの。はい、決定」

「えー……横暴だー。ぶーぶー」

一面は上部に剣道部。入谷先輩と綾太の写真を並べる。あとは下側の野球部の結果で記事の大きさを調整して、本文を書けば完成だ。

「今年は入谷先輩はどこまで進めるんですかね。全国は確実だって長谷部先輩は言っていましたけど。尊敬補正が入ってるからイマイチ信用できなくって」

過去の成績は一年で県三位。二年で全国大会初戦と年々順位を上げていた。特に去年は剣道部初の全国大会出場で顧問の先生が大喜びしていたのを思いだす。

「いけるんじゃないか？ まあ期待されてる人に限って急に負けたりするかもしれないけどな」

「あれー？ 佐倉先輩が嫌味なんて珍しいですね。あ、わかった。予選で怒られたの根に持つてるでしょ」

「なんだよ。ガキみたいだって言いたいのか？」

「いいえ。可愛いところあるなって」

「はあ？ 可愛いってなんだよ。殴んぞ」

「うわー、先輩がおこったー」

両手を頭に寄せ、困ってみせる。わざとらしすぎて怒る気もうせた。

「ねえねえ、キスしましょ」

「いや、脈絡なさすぎだろ」

「いいじゃないですか。練習ですよ練習」

肩に頭を乗せ、ネコみたいに頬をこすりつける。今日こそ拒否しないと。

「駄目だつて。あと少しで完成なんだから。終わつてか——」

下から覗きこむように顔を近づけられ、唇が重なる。その瞬間、部屋から音が消えた。

「あれ？ 怒らないんですか？」

返事がわかつているくせにわざわざ聞く。答えられない俺にいたずらっぽく微笑み、

またキスをする。何度も唇が触れ、その度に小さな水音が立った。

楓が体重を預けてきて、背中に手が回る。誘われるまま抱きしめ返すとキスが深まっ

た。

「んっ」

声変わり前の高い声が耳に響く。本能的に腕に力が入りそうになり、必至にこらえた。

ここで負けたら今までと同じじゃないか。

「先輩ってキスも上手いですよね」

頬を上気させた楓が微笑む。

気持ちいい、って怖い。後に罪悪感がやってくるかわかっているけど、際限なく欲しく

なる。頭が欲に染まりだし、言葉が出てこない。顔をそらすのがやっとだ。

(H
シ
ー
ン
約
3
0
0
0
字
中
略
)

「すごい量……溜まってたんですね」

精子は互いのカッターシャツまで飛び、大きなシミを作っていた。萎えたチンコは二人の精液まみれで、手を離すと何本もの糸を引いた。汚れた手を見て、楓は無邪気に笑う。

「えへへ。人をイカせるのって達成感がありますね」

まるでゲームで勝ったように言う。快感で塗りつぶされていた困惑と恐怖がにじみ出て、声が震えた。

「なんで……こんなことするんだよ」

「先輩？」

目頭が熱くなって、視界がにじむ。

「えっ？ 先輩泣いて……。あつ、ごめんなさい。その、えつと……」

楓はティッシュを取り、チンコを拭き始めた。子供みたくに後始末をされる光景を見ていられず、俺は顔を背ける。ボクサーパンツを穿き直され、ズボンのファスナーまで閉められる。

「ほ、ほら！ 綺麗になりましたよ！ だから泣きやんでください。ねっ？」

なだめられると余計に涙があふれた。さっきまでの貪欲な姿と、今のギャップに心が追いつかない。そこに色んな罪悪感とわずかに残った快感が混じって感情がいっぱい

つばいだ。

もう無理だ。

「……帰る」

「え？　なんでですか？」

「帰るったら帰る！」

「せ、先輩っ。待って！」

後ろから呼ぶ声が聞こえたが無視した。荷物も持たず、廊下に出る。

階段にさしかかり、降りようとしたときだった。いきなりズボンがずり落ちた。そういえば、ベルトを留めていない。

次の瞬間には膝がつかかかって前のめりになる。目の前には階段が――。
世界が、回った。

□ ■ □ □ 6章 □ ■ □ □

「ウンコしてベルト留め忘れてたとかダッセーな」

クラスメイトの長島はコンコンと右足のギブスをノックする。

「いてっ！ 響くんだから叩くなって」

ベッドの周りには学校帰りの友達がたむろしていた。お見舞いといいつつ、勝手にゲームを起動し、漫画をガッツリ読みだし、病院から借りた松葉杖で遊び、とやりたい放題だ。

楓から逃げ、階段から落ちた俺は足の甲を骨折してしまった。レントゲン写真では小さなヒビが入っただけだったのに、ふくらはぎから指の付け根まで大げさなギブスがつけられている。

人生初ギブスだったので最初こそテンションは上がったが、腫れて痛みだすと一気に憂鬱になった。全く眠れないし、松葉杖を使っても歩けないので学校も休んだ。

「そんでいつから学校来られるんだよ」

「月曜には行くつもり。家にいるの飽きちまった」

「おっ、んじや終業式は出られるのか。良かったじゃん」

引きこもっていたおかげか、やっと腫れもおさまってきた。まだ痛むけど、学校に行けるなら我慢できる。

「なーなー。なんで入院してねーの？　せっかくリアル看護師さん見れると思ったのに」

「でたよ看護師スキー。言っとくけどミニスカートってエロ動画だけで、本物はズボンだぞ」

「ウソっマジでっ!?!」

本気で知らなかったらしく、コスプレAV好きの藤本は一人ショックを受けている。

「なー佐倉。この巻の続きどこー?」

今度は漫画を読みあさっていた大石が会話に割りこむ。今野と木津は松葉杖でどちらが長く体を浮かせられるか勝負している。うるさいけど、休み時間みたいな空気がなんだか懐かしい。早く学校に戻りたい。

すると長島がおもむろに立ち上がった。

「よーし、そろそろやるか」

周囲に目配せすると、あれだけ騒いでいたみんなが急に手を止め、ベッドを取り囲む。

「え？ なに？」

「決まってるだろ？」

そして、一斉にポケットから油性ペンを取り出す。

「ギブスに応援メッセージを書きに来たんだよ」

しかし顔には悪い笑みが浮かぶ。イタズラする気満々だ。

「いやー、気持ちは嬉しいけど遠慮し——」

「問答無用！ かかれー！」

長島の合図と同時に二人が馬乗りになって、俺の動きを封じた。

「ぐえっ！ 重っ！ 重いつて！」

「往生際がわりーぞ」

もがいたが胸の上に大柄な藤本に座られ、さらに両手首を捕まれて自由がきかない。

左足だけで抵抗したが、すぐに押さえつけられた。

入れかわり立ちかわり、メッセージを書く。だが絶対にろくなものじゃない。藤本をどかそうと腹を叩く。すると小さな破裂音がした。

「ん？ ——うわつくっさ！ お前おならしてんじゃねえよっ！」

胸を強く押すと、藤本が後ろに転がった。それを避けようとみんなが離れ、荷物を拾って逃げるように部屋から出て行く。

「じゃーなー」

「ばーいびー」

「あでゅー」

「お大事にー！」

「また学校でなー！」

ドタバタと音を立てて廊下を走り、玄関へ向かう。

「おーし、靴履いたなー？　せーのっ」

「「「おじゃまりましたー」」」

俺の部屋はマンションの外廊下に面しているので、針金入りの曇りガラスにうつすと廊下を歩く人のシルエットが映る。

長島たちは「ばいばい」と手を振り、窓をノックした。あちらからは見えないとわかっていても小さく手を振り返す。

「二度とくんなー！　——いちち」

転がった藤本を避けるために、足に力を入れたせいで鈍く痛んだ。

ギブスには『骨折記念』とか『俺様参上！』とか『焼肉定食』とか意味不明なもの。ドクロマークとかハートとか、好き放題に書かれている。

でも中には『回復折願』（『祈…いのる』じゃなくて『折…おれる』なのはご愛敬

だ)とか。『ケアル！ ケアルラ！ ケアルガ！』なんて呪文を見つけると頬が緩む。

「まったくもー」

口からは文句が出るのに、文字に触れると足の痛みが消えていく。まあ別に感謝なんでするつもりはないけどさ。

するとインターフォンが鳴った。誰か忘れ物でもしたんだろうか。

「忘れ物かー？ カギしめてねーから入ってくれー」

玄関が開き、「お邪魔しまーす」と高い声。

すぐに綾太だと気づき嬉しくなる。だが続いて「お邪魔します」と低い声が続く。その主が誰なのか、一瞬で分かった。でも、どうしてあの人か？ 困惑もしきれないうちに綾太が部屋をのぞきこみ、片手を上げる。そして入谷先輩も一緒に入ってきた。

「よっ。生きてるかー？」

「こんにちは、お邪魔します」

「見舞いに行くって話したらぜひ、って。先輩の優しさに感謝しろよ」

なぜか胸を張って威張る綾太に先輩は苦笑する。

「これ、うちの近くのケーキ屋さんで評判のクッキーなんだ。良かったら食べて」

渡し慣れているのか、自然な動作で小さな紙袋を差しだされる。しかしもらった経験がない俺は丁寧な受け取り方がわからず、上部の両端を指で摘まんだ。ええと、お礼を

言わなきや。けど、言い回しがわからない。

「あ、ありがとうございます。過分な頂き物を」

精一杯の敬語のつもりだったが、冗談と勘違いした綾太が笑う。

「悠貴、熱でもあんのか？」

「えっと……あるかもしれない」

さつきから顔が熱いし、心臓がドキドキと大きな音を立てていた。それになんとか変だ。先輩をまっすぐ見ることができない。

「具合はどう？」

「え、えっと、順調です。その、来週には学校に行こうかなって考えてます」

「そうか良かった。それじゃあ県大会の取材にもこれるのかい？」

「も、もちろんです。這ってでも行きます！」

つい言葉に力を込めてしまう。たかが部活なのに必死になっているみたいで格好悪い。自分にツツコミを入れるが、テンションが勝手に上がるのを抑えられない。暴走している車に乗っているみたいだ。しかもシートベルトはついていない。

すると綾太が小さく吹きだした。

「何だよいきなり？」

「だって、それ」

ギブスの側面を指さされ、体をひねって見てみる。そこには『SEX』とか『オナニーマスター』とかエロい単語が書かれていた。

「あ、あいつらっ！」

タオルケットで足を隠す。くそう。来週、登校したら覚えてろよ。

「いい友達だね」

「そ、そんなことないですよ。人がケガしてるのにあいつら全然遠慮しないし。これじや学校いけないじゃないですか」

先輩は笑うが、恥ずかしくて仕方がない。『オナニーマスター』が間違っていないからだ。

目だけを動かし、部屋の隅のゴミ箱を見る。外に出られない分、有り余ったエネルギーは性欲に変わっていた。一日に二回、多い時は三回だ。

匂っていないよな。音をたてないように匂いをかぐ。

そういうえば寝癖を直していない。服だって寝間着のTシャツにジャージのハーフパンツとだらしがない。なんだかもう全てが気になってきた。

「え、えっと……あ、そうだ。話ってなんですか？」

「うん。君の記事を読んだんだ」

先輩は鞆から一枚の紙を取りだす。千紫万紅の夏休み前の号外だ。引きこもって

たせいで時間の感覚が薄れて、今日が発行だと忘れていた。

学校には行けなくても、データはネットでやり取りできる。ヒマを持って余していたので何度も推敲して完璧なものに仕上げたのだ。

一面トップはもちろん入谷先輩だ。見出しは『三年連続全国大会出場か』。初めは『！』は一つだけだったが、手直しする毎にすごさを示すには足りない気がして付け加えたのだ。

「良い記事を書いてくれたからお礼を言いたいと思って。ちょっと褒めすぎだけどね」
すると綾太が「そんなことないです」と否定した。

「部長は本当にすごいんですから！ 謙遜なんかしないでとドーンと構えてください！」

鼻息荒く力説する。なんだか後輩というよりファンみたいだ。

「顧問の先生も出来が良いって褒めてくれて。賞に応募するとか言ってるんです」

「へえ、すごいじゃないか。新聞の大会か。文化部の総体みたいなものなのかな」

思ったより食いつきがよくて、俺はしどろもどろになる。

「そんな大したものじゃないんです。地方新聞が主催のやつだし、応募数だって数十個くらいだし」

関東の学校限定。しかも新聞部がある学校なんて数えるほどしかない。数万の学生の

頂点である全国大会に出場経験のある人に対して、話すのがバカみたいなスケールの小ささだ。

「そんなことないよ。剣道にも段位審査があるけど、合格は簡単じゃない。審査員は段位を持ったプロだからね。新聞も同じだよ。プロに評価してもらうことに変わりはない。——って固いこと言っちゃったな。けど、きつと良い結果がでるよ。佐倉くんの文章って熱を感じるもの。俺はこういうの苦手だし。どうやったら書けるのか教えて欲しいくらい」

先輩は号外をじつと見る。

「あ、ありがとうございます」

先輩に褒められると、とてもむず痒い気持ちになる。作ったものを通して、素の感情を見られているような気分になるからだ。体が勝手にそわそわとし始め、座っているのが辛くなってきた。

「え、えっと……そうだお茶！ お茶入れてきますね！」

一旦離れて冷静になろう。ベッドから立ち上がり、二人の間をすり抜けようとする。だが右足を床に置いた瞬間、痛みが走った。

「おっと」

先輩は素早く体を動かし、俺を受け止めてくれた。勢いのまま俺は先輩の胸に顔をう

ずめてしまう。

「大丈夫かい？」

大丈夫、と答えられないくらい俺はパニックになっていた。心臓がどくどくと鳴り、顔が一気に熱くなる。そこに部活後の汗の匂いがして、今度は心の中で何かが大きく膨らんだ。

「す、すみません！」

一瞬でも早く離れたくて、つい胸を押してしまう。だが大柄な体はビクともせず、逆に跳ね飛ばされて尻餅をつく。先輩はそんな俺を持ち上げ、ベッドに座らせてくれた。

「よし。そろそろ俺は帰ろうかな」

「え？」

「それじゃあ、お大事に。お邪魔しました」

微笑むと部屋を出てしまう。玄関の扉が閉まり、磨りガラスを影が横切る。

いきなりどうして？ 落胆しつつ息をはく。あのまま一緒にいたら、どうにかなってしまうところだった。

「おい」

綾太の苛立った声にふり向くと、なぜか俺を睨んでいた。

「お前、どういうつもりだよ」

「なにが？」

「折角お見舞いに来てくれたのに、なんだよあの態度。失礼すぎるだろ。前に怒られたのは騒いでた僕たちが悪いのに、まだ根に持つてるのか」

「は？ そんなことねえって」

「じゃあ、なんで逃げようとしたんだよ」

「え……？」

そんな風に見えていたのか。

「違うって。嫌いなんじゃなくて……」

だが答えられない。友達や綾太ならだらしな性格好でも、記事を読まれても、体に触れても平気だからだ。なぜ入谷先輩だけ恥ずかしく感じるのか。理由がわからない。自分の気持ちなのに霧がかかったように隠れている。

「……お前、最近変だぞ」

「どこが？ いつも通りだし」

「いや、変だ。楓のこともそうだし」

「はあ？ なんて楓の話になるんだよ。あいつはカンケーねえだろ」

いきなり楓の名前がでてきて、つい感情的になってしまふ。それが綾太にも伝染した。「関係なくないよ。やたらと僕たちのこと聞いてくるじゃん。そんなに気になんの？」

「そりやそうだろ。親友なんだから」

「だからって会うたびに話題にするとかおかしいだろ。ハッキリ言って異常だぞ。僕らの問題に首を突っこむなよ」

突き放すような一言に息が詰まる。よかれと思って相談に乗っていたつもりだった。なのに嫌がられていたなんて。ありきたりな言い訳を口にしそうになるが飲みこむ。

初めは純粹に二人のことを心配していた。でもキスの練習をし始めてから、俺は綾太をせつつくようになった。いつか練習を越えて、それ以上のことをしてしまいう予感があったから。そして、してしまった。

「……お前は親友だし、楓は大事な後輩だから」

本心だった。しかし罪悪感で弱々しくなった口調が綾太を苛つかせた。きつと強く言い切つて欲しかったんだと思う。お前らは大事だから首を突っこむぜと言つて欲しかったんだと思う。もちろんケンカになる。でも、そしたらお互いに本音をぶつけあえる。なのに俺は引いてしまった。綾太は眉根を寄せ、さらに苛立つ。

「ああもうっ。悠貴つてばどうしちゃったんだよ。頭も打つたんじゃないの？」

声を裏返らせて煽つてきても何も答えられない。俺は確かにどこかおかしくなっているから。

「……もういい！」

荷物を掴み、早足で部屋を出て行く。

「おじやましました！」

玄関ドアが大きな音を立てて閉まり、外廊下から苛立った足音が響く。綾太の気配が遠ざかると、俺は安堵の息を吐きだしてしまった。

うじうじと悩んでいたら、いつの間にか夕方になっていた。スマホの画面を眩しく感じて、始めて数時間が過ぎていたことに気づく。

綾太にメッセージを送ろうとしても考えがまとまらなかった。短い言葉では説明できず、長々と書けば言い訳に思えて全て消す。残るのは『ごめん』の一言だけだ。

曖昧な謝罪をしても余計に苛つかせるだけだ。いくら親友でも俺のことを一から百までわかるわけじゃない。ちゃんと言葉で伝えなくてはいけないとわかっているのに、言葉にできない。それがすごく気持ち悪い。

晩ご飯の時間になっても、食欲はなかった。心配されないくらいの量を胃に押しこんで部屋に戻る。

無理に食べてもお腹が膨れると落ち着くものらしい。ベッドに寝転んで、少し冷静になった頭で考える。ただ、いくら考えても良い案は浮かばない。時間が解決してくれるのを待つしかないように思えた。

楓ともあれ以来、ほとんど話をしていない。新聞部の活動に必要な連絡を事務的にこなししているだけだ。来週、登校しても部室に行くつもりはないし、次に顔を合わせるの
は剣道部の県大会だ。

終業式は水曜日。大会は日曜日なので、まだ一週間近くある。

「はー……」

なんでこうなってしまったんだろう。考えれば考えるほど気持ち沈んでいく。

今日はもう寝よう。

電気を消して目をつむる。けれど暗闇の中にと、思考が加速し始めた。何が悪かったのか一から振り返ってしまう。

それが抱きとめられた瞬間に至ると、ぼつと顔が熱くなった。シャツ越しに感じた体温に、肩を掴んだ力強さ、声変わりした男らしい低い声。そして……汗と剣道の防具の独特な匂い。

先輩は十分くらいしか部屋にいなかったから匂いが残っているはずがない。なのに鼻を鳴らすと記憶の残り香がした。

「んっ」

腰の奥がきゅんとして、股間が熱を帯び、すぐに形になって下着を持ちあげる。

(エミーン 約1000字中略)

少しの間、気持ちよさに浸っていたが、数分もすると熱が冷めだす。そして、後悔と罪悪感が襲ってきた。

「俺……どうしちゃったんだよ」

男で、しかも先輩の裸で抜いてしまうなんて。

「はぁー……」

俺、ゲイなんだろうか。楓と同じで男とセックスしたがってるんだろうか。

射精後の眠気に襲われつつ、スマホを拾って検索欄に『ゲイ セックス』と入力する。
「うわっ……」

勃起したチンコがデカデカと映った動画のサムネイルが出てきて、つい嫌悪の声をあげてしまう。正直、続きを見るのが怖い。けれど好奇心には勝てずに動画のページを開く。おさまっていた心臓の鼓動がまた強くなり、鼻息が荒くなった。

男同士ではお尻の穴を使う。それを友達同士で冗談のネタにしたこともある。しかし知識はあっても実際の映像は見たことがなかった。

再生ボタンをタップする指に勝手に力が入る。

動画では裸の男同士がキスして、お互いのチンコを触りあう。そして挿入して、腰を振る。低いあえぎ声が耳に響いた。

すぐにしんどくなつて、画面を切って枕元に放り投げる。バウンドしたスマホは床に

落ちて転がった。

枕に顔を押しつける。見るんじやなかった。後悔しているのに頭の中では繰り返してピートされる。俺は先輩とアレをしたがってるのか。

「違う。俺は変なことなんか考えてない」

先輩への気持ちは憧れとか尊敬であって、決して邪なものじゃない。抜いてしまったのは、ただムシャクシャしていたのをスッキリさせたからだ。楓や綾太ともうまくいっていないし、骨折して動けなくてストレスも溜まっていた。情緒不安定になっていただけだ。

そう結論づけて考えるのを止めた。布団を被り、目をつむる。

なのにリピートは止まらない。興味本位で体勢を真似てみる。足を広げ、膝裏を持って上げる。この間に先輩が体を入れて――

「って……俺ってそっちなの？」

自然と挿入される側をイメージしてさらに混乱した。お尻の穴に服の上から触れる。

「ここに先輩のチンコを？ 無理無理っ」

強く頭を振るが脳裏に張りついたイメージは消えない。

顔が熱くなり、またチンコが固くなりだした。今日の俺はおかしくなっている。

なのに手が股間に伸びる。

その日の夢は、先輩と一緒にだった。

□ ■ □ □ 7章 □ ■ □ □

いくら止まって欲しいと願っていても、寝て起きたら日付は進む。学校に戻れたと思っただけに終業式。夏休みに入り、剣道部の県大会の日を迎えてしまった。

取材に行くのは俺と楓だ。楓とはあれから一度も話しておらず、時間が空いたせいで会うのが余計に気まずい。

何か理由をつけて休むことも考えたが、それなら綾太が俺と楓とのギクシャクに気付く。自分のことには鈍感だけど、人の機微には敏感な奴だから。まだ仲直りもできていないのに、さらにこんがらがるのはご免だ。

それに……入谷先輩の試合を見逃したくない。こんな時まで先輩のことを考える自分は馬鹿なんじゃないだろうか。

自虐しつつも、楽しみな気持ちは止まらない。前日の夜は念入りに準備をし、忘れ物がないかも何度も確認した。勇姿を取り逃すまいと気合いも入る。もちろん、綾太の試合も同じくらしいの意気込みだ。

当日は目覚ましのアラームが鳴る一時間前に目が覚め、制服に着替える。両手に松葉杖、背中に機材の入ったリュックを背負って家を出た。

夏休みになると、いよいよ夏本番だ。朝は暑さはマシだが太陽の光は強烈で、腕に当たると皮膚の隙間がピシピシと痛む。松葉杖のせいで脇が汗ばみ、ギブスの内側が湿気る。せっかく巻き直してもらったのに、また臭くなってしまいそうだ。

えっちらおっちらと進み、集合時間の十分前には待ちあわせ場所のコンビニにたどり着いた。

ただ、いきなり顔を合わせるの怖い。外から店内をのぞき、雑誌売り場に楓がいるのを確認する。そして他のお客さんを盾にして中に入った。俺がいつも遅刻ギリギリにくるのを知っているからか、楓は雑誌に集中していた。

柵に身を隠して様子をおかがう。見た目は以前と変わりなく、襲ってきた時みたいに鬼気迫る雰囲気はない。読んでいるのは夏のイベント誌だ。綾太とのデートでも計画しているのだろうか。

声をかけるか悩んでいると、視線を感じたのか振りむく。どう反応すればいいのかかわからず、曖昧に微笑んで片手を軽く上げるのが精一杯だった。

「よお」

楓はいきなり頭を下げた。

「本当につ、すみませんでした！」

「は……？」

「本当にごめんなさい！ 僕、あんなことしちゃうなんて！ しかも骨折まで……本当
に、本当にごめんなさい！」

土下座をしそうな勢いでさらに深く頭を下げる。

「頼むから落ち着いてくれ」

腕を取り、他のお客さんや店員さんの視線から逃げるように外に出る。店の裏手に移
動しても楓は叱られた犬みたいに肩を落としていた。

「その、本当にごめんなさい」

「わかったから」

謝り倒されると話が續かない。

「どうしてあんなことしたんだよ」

「……わかりません」

「わからない？」

「はい。キスしてたらどんどん気持ち盛りが上がっちゃって。気づいた時にはもう終わ
ってたんです」

「つまり、魔が差したってことか？」

気まずそうに小さく頷く。

どうしたものかな、と頭をかく。楓は練習を言い訳にキスを繰り返して、過剰なほど甘えてきた。まるで恋人相手にするように。俺を綾太の代わりにしたんだ。

すごく自分勝手だ。でも、不思議と怒りはわかない。自分でもわからない衝動に突き動かされるのは心当たりがあったから。それを責めても不毛なだけだ。あとは俺が許せるかどうか。

「……わかったよ」

俺は大きく息をはいた。

「え？ それじゃ……」

「うん。許すよ」

本当に反省しているみたいだし、謝罪を受け入れることにした。空気を変えようと、あえて大きな声を出す。

「よし！ この話はこれで終わり！ 気持ち切り替えて行こうぜ！」

「はい！ あ、荷物持ちますね！」

電車に乗り、山向こうの市へ移動する。会場は県でも指折りの大型会場、すぎみやアリーナだ。

二年前に完成したばかりで、夏休みは毎日のように大会が開かれる。

先月の地区予選や、他の室内競技でも何度も取材に訪れた。場に慣れているつもりだったが、一步会場に入るとピリつとした緊張感に包まれ、肌がざわつく。

予選の時とは大違いだ。予選は一年から三年まで参加するので人数が多く、試合が始まるまで騒がしかった。

しかし今日はしんと静まりかえっている。ひりついた空気に背筋が勝手に伸び、部外者の俺でさえ、一度深呼吸をして体を慣らさないといけないほどだ。

メッセーシアプリで綾太と連絡を取り、二階へ向かう。会場は長方形で、一階の試合場を二階のすり鉢型の客席が囲む。一部は選手専用になっており、学校関係者の待機場所と荷物置き場を兼ねていた。

綾太と合流すると、すでに面以外の防具を身につけていた。

「おっす」

「おう。——やっ」

俺にも楓にも軽く挨拶をする。三人でいると、綾太の楓への態度は余所余所しい。恋人として仲良くしている所を俺に見られるのが嫌なのだろう。

「予選と空気が全然違うな」

「だよ。僕もさつきから武者震いが止まんない」

ゆっくりと会場を一瞥する。普段は楓の前では『俺』を使うのに『僕』のままだ。相

当、緊張しているようだ。

まだ仲直りしていないから会話がぎこちない。ただ嫌な感じはしなかった。

「先輩は？」

「あっち」

少し面倒くさそうに通路を指さす。入谷先輩は和服姿の人と話していた。

長く伸ばされた白いヒゲに夏用の茶色の和服にメッシュの黒羽織を着ている。上泉武具店のおじいさんだ。範士というのはウソではないようで、先輩も姿勢を正し、緊張した面持ちだ。

話が終わり、先輩がこっちに降りてくる。そして俺と目が合うと爽やかな笑顔を見せた。

「こんにちは。来てくれたんだね。迷わなかった？」

「当然です。子供じゃないんですから」

生意気な言葉が口から勝手に出る。真横から強いプレッシャーを感じ、綾太に睨まれているのがわかった。

「すごいな。僕なんか逆方向の電車に乗りかけちゃったのに。長谷部くんがいなかったら、遅刻で失格してた所だよ」

「部活の仕事ですから。下調べはちゃんとします」

貴方と違つてね。なんて語尾がつきそうな最悪な言い回しだ。そんなつもりはないのに。だが先輩は嫌な顔もせずに微笑む。

「そうか。さすがだなあ。来てくれてありがとう。また格好良い写真を頼むよ」
ウインクされ心臓がドキリとする。

「は、はい……。その……。頑張ってください」

「うん。頑張るよ。ありがとう」

微笑まれ、顔がほわっと熱くなる。鼓膜がトクトクと心地のいいリズムが響き、落ちて着かない。体が揺れているみたいを意識がフワフワとして、松葉杖をしっかりと握らないと倒れてしまいそうだ。

そんな俺を綾太がじっと見ていた。

「なんだよ？」

「べつにー」

わざとらしく語尾を伸ばすと入谷先輩に駆け寄る。

「部長ー、そろそろ検量に行きましょう」

試合に使う竹刀は全て検査を受けなくてはならない。

昔、剣先を軽くするために先端の竹を削って薄くしたり、重心を手前にするために柄の部分に粘土を詰めたり、改造する学生がいたらしい。そのせいで刀身がもろくなり、

試合中に竹刀が割れて大ケガをする事故が起きたからだ。

カメラを持ち、二人と一緒に検量場へ向かう。ここでは選手が列を作っていた。一つ、スーツ姿の係員が机に置かれた金属製の検量器でチェックしていく。

俺たちの学年だと長さは二メートル以内、重さは二キログラム以内だ。さらに竹刀の先端、全体の直径も測定される。

わざと改造する人はほとんどいない。しかし偶然ひっかかるかもしれない。そんな妙な緊張感が漂っていて、写真を撮る空気ではなかった。

心配は杞憂に終わり、検量は無事に終わった。合格のシールを竹刀に貼れば開始式を待っただけだ。

その間に対戦表で試合場所をチェックし、カメラ位置を決める。試合場は二箇所あり。一人はここから大丈夫だが、もう一人は一般席に移動しなくてはいけない。

「遠い方は僕がいきませぬね」

警備のため関係者席から出るには一階の専用ゲートを通る必要がある。階段横にはスロープが完備されているものの松葉杖で往復は大変だ。

「すまね。助かるわ」

撮影許可証を胸ポケットにつけると一層、気持ち引き締まる。

綾太と入谷先輩は緊張がほぐれたのか雑談を始めていた。胴着姿で話す姿は絵になる。

俺はさりげなく斜め下に移動し、カメラを向ける。だがシャッターを押す寸前に先輩が指だけを動かしてピースをした。

「うまく撮れたー?」

「せんばーい。ポーズされると使えなくなっちゃうんです」

たぶん『緊張感が足りない』みたいな理由で先生からNGを喰らう。

「あ、そうなのか。ごめん」

するとすっと背筋を伸ばした。そこに綾太も乗っかるものだから、作った感がものすごい絵面になる。

「もー」

しょうがないので一枚撮ってやる。シャッターを切ると二人は声を潜ませて笑った。その光景がとても良い雰囲気です。再度レンズを向ける。これも新聞には使えない。けれど来た甲斐がある写真が撮れたと思う。

試合前に集中を乱したくないので、インタビュはしない。かわりに客席や試合場の様子を観察してメモする。カメラでは残らない臨場感を記憶しておくためだ。

そうしている内に開始式の時間が近づく。試合が始まれば、選手は別室で待機するので戻ってこられない。

「楓?」

「はい？　なんですか？」

「なにぼうつとしてるんだよ。取材メモ取ってるか？」

「あつ、すみません。すぐやります」

さつきから上の空だ。というのも最初に挨拶をしただけで、綾太と全く会話をしていないのだ。話す機会をうかがっているが相手は一人になると通路を往復したり、胴着の結びを何度も直したり、指のマメを触ったりと落ち着きがない。

なのに背筋だけはまっすぐで、緊張の板を背中に張りつけたみたいだ。気持ちにはわかるけど、一言くらい声をかけてやればいいのに。首を突っこむなと言われたので我慢していたが、段々イライラしてきた。

会場のスピーカーから鉄琴のチャイムが鳴り、指定の場所に選手は集合するようにとアナウンスが流れる。綾太と入谷先輩は立ち上がり一階へ向かおうとした。最後のチャンスに期待するが、何も言わないまま俺たちの横を通りすぎる。

「あ……」

楓の手が僅かに動く。しかしすぐに握りしめ、こらえるようにお腹の上に置く。いてもたってもいられず、綾太を追いかけ肩を掴んだ。

「おい、ちょっと待て」

「え？　なに？」

「なに？　じゃねえよ。大事なこと忘れてんぞ」

背中を押し、楓を綾太の前に立たせる。

「えっと、その……」

楓が不安げに俺を振り返るが、わざと視線をそらして口笛を吹いてみせる。ついに意を決したのか口を開いた。

「長谷部先輩。が、頑張ってください。僕、応援してますから」

だが答えは「あ、うん」と曖昧なものだった。

「ありがと。試合中は声援禁止だから注意してくれよ」

「いや、そうじゃねえだろ！」

あまりのズレっぷりにツッコんでしまう。『六獄の湯』の帰りに見せた気概はどこに行っただよ。

「ああもう！　見てらんないわ！　楓はずっと声かけられるのを待ってたんだぞ」

「……あっ！」

綾太はそこでようやく楓の顔を見た。

「なのにお前ときたら全く周りが見えてないし。初めての県大会で緊張してるのはわかるけどさ。ちよつとは楓のこと気にかけてやれよ」

不自然にまっすぐだった背筋が溶けるように、綾太はしおしおと背中を丸める。

「……ごめん。俺、自分のことばかりで頭がいつぱいになってた」

「いえ。先輩にとつて大事な試合だつてわかつてますから」

「長谷部くんー。早くー！」

入谷先輩の声が飛んできて、綾太は「すぐ行きます！」と答える。

拳を握り、楓の胸に当てた。

「俺、頑張るよ。お前に格好いいとこ見せてやる。絶対に見逃すなよ」

今日、初めての綾太らしい笑顔を見せ、走りだす。楓は小突かれた胸に手を置き、小さな背中が階段に消えるまで見送っていた。

「ったく。あいつも緊張しすぎだよ。……恋人のこと忘れるなんてな」

恋人か、大事な人か、言い回しに一瞬悩んだが変に気をつかうのはもう止めた。

「まあ長谷部先輩らしいですよ。ありがとうございます」

「礼なんていいよ。お前らがギクシャクしたら俺が困るし。それより準備始めようぜ」
「……はい！」

一階の競技場に選手が整列し、開始式が始まった。

正面には県旗と国旗が並び、真下にマイクのある演台。左右には白い布を引いた長机が広がる。そこに座る黒スーツ姿の大人たちの前には役職の書いた紙が貼りつけられていた。『大会委員』『審判員』『来客』『参与』と様々だ。

そして『大会委員長』『連盟会長』の肩書きを持つ人がいた、茶色の渋い色の和服姿で遠目でもわかるくらい長い白髭。まるで時代劇に出てきそうな――？

「えええっ!？」

静まりかえった会場に俺の声が響き、慌てて手すりの裏に隠れた。

「なにやっつてんですか先輩っ？」

勘違いされてはたまらないと楓もしゃがむ。

「知ってる人だったから、ビックリして」

このまま顔を出したら犯人だってバレバレだ。身を低くしたまま横に数メートル移動し、自分は違いますよという顔をして立ち上がる。幸い、式は何事もなかったように進んでいた。

「それでは連盟会長・上泉^{かみいずみながよし}長恵様からお言葉を頂きます」

すごい称号を持つ人、とは聞いていたけれど連盟会長だっけ？

カメラをズームして綾太の様子をうかがうと、驚いた様子もなく真面目に話を聞いていた。

「あいつ、黙ってたな」

「あの人が会長ってことですか？」

「え？ 楓は知ってるの？」

「ええ。タコ占いの話は聞いてたので」

「なんだよ。知らないの俺だけかよ」

どうして教えてくれなかったんだ。心の中で愚痴ったが、最近では会うと恋愛話ばかりで、雑談をあまりしていなかった。これじゃあ嫌がられても当然だ。俺も反省しないといけないな。

開始式が終わると、すぐに試合が始まった。

剣道の試合場は9×11メートルの正方形をしている。中心に×印があり、1.4メートルの位置に開始位置を示す線が二つ。とてもシンプルだ。

面をつけ竹刀を持った綾太は第一試合場の待機位置に移動すると、垂直跳びをし、腕を回して体をほぐす。

剣道はフル装備になると遠目では誰だか判別できない。なので防具の垂たれに名前を書いた袋をつける。いわゆる『垂たれネーム』だ。ただ綾太は背格好でわかってしまう。開始式でも頭一つ小さくて目立っていた。

『準備オツケーです』

スマホにメッセージが届き、綾太の斜め後ろの観客席を見ると、楓が大きく手を振っていた。振り返し、俺もカメラを起動する。

シャッター音とフラッシュの設定画面を開く。この二つの機能はスポーツでは御法度

だ。特に試合中静かになる剣道では、小さな音一つで勝敗が変わってしまうこともある。

『設定再確認な』

『わかってますよ。オールオッケーです』

試合の時間が近づくと緊張が高まり、俺まで武者震いがした。

初戦の対戦相手は三年生。去年は県大会準優勝の人だ。身長は170センチあり、体格は大人じみている。待機場所で仁王立ちをする姿は強者感があつた。

と、その時あることに気付いた。綾太は楓が後ろに知っているのだろうか。教える機会はなかったし、試合会場を見回す仕草も見せない。

もしさっきの約束が果たせなかったら、試合に影響するかもしれない。俺は一人ハラハラし始めていた。

剣道は試合中だけでなく前後の動作にも厳しい。礼儀を重んじているので、挑発はもちろん、ガッツポーズすら禁止だ。行えば反則負けもありえる。試合直前にキョロキョロするのも心証が悪い。

心配しているうちに紅白の旗を持った三人の審判が試合場に入る。

綾太が俺を見る。あつちだ、と反対側を指そうとしたが、すぐに視線を戻してしまう。そんな、ここまでできて。どうにかできないか必死に考えても思いつかない。もう試合

が始まってしまふ。

その時だ。綾太は体ごと後ろを向いた。小手で胸当てに触れると、ゆっくりと観客席を見上げた。二人の視線が合ったのか、胸を叩く。深呼吸をしたように見える絶妙な仕草だ。

楓も胸に手を置き返したのを見て、俺は脱力した。

わかっていたのかよ。心配したのが馬鹿みたいじゃないか。

心の中で毒づきながらも違和感を持つ。じゃあ、なんで綾太はこっちを見たんだ？ 楓を探していたのではない。ということとは……俺にわざわざ視線をくれたのか？

次の瞬間、気持ちが一気に高揚するのを感じた。口元が緩み、親友のことが好きで好きでたまらなくなる。でも同時にムカついた。綾太のくせに格好良すぎだ。

カメラを構え直す。お返しに格好良い写真を撮ってやるからな。

選手の名前がアナウンスされ、二人は試合場に足を踏み入れる。開始位置手前で目礼し、開始線に立つと竹刀を構えてしゃがんだ。そして『始め』の合図と共に立ち、試合が開始される。

向き合うと身長差が残酷なくらい強調された。綾太は常に見上げる格好になり、腕の長さも大きく違う。相手の剣先は何もしなくても綾太の頭頂部と同じ高さにあった。

だが一方で胴や小手を狙いにくい。だから素早く左右に動くのが基本、と話していた

のを思いだす。事実、予選ではその戦法で勝利をおさめた。

なのに今の綾太はそれを忘れてしまったように正対していた。

相手選手が近づき、二人の竹刀が触れる。カチツと小さな固い音がした次の瞬間、綾太は鋭い動きで相手の竹刀をはじいた。剣先が明後日を向く。

大きなスキが生まれた。すかさず攻撃に移るのかとカメラを持つ手に力が入る。だが綾太は動かず構えなおした。

不思議な行動に俺は眉をひそめる。折角のチャンスだったのに。

するとどうだろう。相手選手がわずかに身を引いたのだ。十センチもない動きだが、綾太はすかさず半歩距離を詰めた。自ら打たれに行くような行動に、思わずカメラをおろしそうになる。

だが相手は攻撃しない。それどころか、たじろぐように一步下がった。さらに距離を詰めると、横に逃げて間合いを取る。

気圧けおされている？

一步、一步とゆっくり近づくと綾太の竹刀を相手は強くはじいて牽制した。しかし即座に構えなおし、スキを作らず着実に間合いを詰める。

まるで漫画の一シーンのようだ。小さな綾太が大きな対戦相手を氣勢で圧倒している。剣道では時間の空費くわひで反則を取られる。審判からすれば、対戦相手は逃げ回っている。

るようにしか見えない。相手もそれを理解しているのか次第に焦り、剣先がブレだした。そしてこらえきれなくなつたように大きく振りかぶる。その瞬間、綾太は前に飛んだ。

「ドオオオオオオ——っ！」

気合いのこもつた声と共に胴を打つた鋭い音が響く。すぐに三人の審判が一斉に赤旗をあげた。二人以上が赤旗を揚げれば有効打突、つまり一本だ。

剣道の一本は『有効打突は、充実した氣勢、適正な姿勢をもって、竹刀の打突部で打突部位を刃筋正しく打突し、残心あるものとす』と定められている。

つまり攻防中に剣先が小手をかすめたり、偶然、面に当たつたとしても一本と判定されない。しかも竹刀であっても刀として切れる部分が、有効な場所に当たらないといけないのだ。

一瞬の攻防では見極めがつかないこともある。だから審判が三人いる。

ただ綾太の一太刀は、何の物言いもできないほど、見事な一本だった。あまりのすごさに声が出ない。

定位置に戻り、二本目が始まる。綾太の氣勢はさらに強まり、相手も必死に抵抗したが敵ではなかった。俺はさらに何十枚もシャッターを切り、勇姿を写真におさめた。

「すつつつつつごいかつこ良かったですね！」

走って戻ってきた楓は声を潜ませながらも大はしゃぎだ。一階では別の試合が始まっているので大声はNGだ。

「あの人、去年県大会準優勝なんですよ！　なのに……なのにストレートで勝っちゃうなんて！　先輩すごい、ほんとすごいです！」

興奮のあまり小さく跳ねる。俺も一緒にはしゃぎたくなるが、記事の文章が次々に浮かんできて、それどころじゃなかった。スマホのメモに急いで入力した。気合いが入ったとはいえ、あそこまで圧倒的だなんて。

もしかして勢いのまま勝ち進むかもしれない。全国大会にいけるかもしれない。頭の中で紙面の構成を変更し始めていた。

「先輩、僕わかつちやいました」

「なにが？」

「僕、長谷部先輩のことむちゃくちゃ好きです」

「ん？　前からそうだろ？」

スマホから楓に視線を移す。そんなのわかりきっていることだ。今までどれだけ相談の皮を被ったノロケを聞かされたかわからない。

「はい。でも、ずっと怖かったです。好きだけど、もし拒否されたらどうしようって。

けどもう、吹っ切れました。ムリだと言われても長谷部先輩を好きでいる決心がつきました」

「え？ それじゃあ……」

懸念を隠せず顔をしかめてしまう。それでも楓は明るく笑った。

「いいんです。遠慮して好きな気持ち伝えられないよりずっといい。それに僕が大人しくしていると思えますか？ フラれても、一度くらいじゃメげません。いつか落としてみせますよ」

余計なことを考えた自分が恥ずかしくなる。そして強い決意を持った楓を格好良いと思った。

「……それはいいけど、綾太の足は折るなよ」

「えっと、気をつけます。ははは」

冗談を言って、残っていた最後のわだかまりがようやく消えた気がした。

そして二回戦、対戦相手は二年生だった。身長は俺と同じくらいで体格も年相応。初戦に比べればなんてことのない選手に見える。

綾太は試合前から闘志をみなぎらせ、先程の完勝で自信をつけたのか堂々とした立ち振る舞いには貫禄すら漂う。試合が始まるとまっすぐに剣先を相手に向けた。覚悟しろと宣言するように。

すると数秒もしないうちに相手が体を引く。すかさず距離を詰めようと一步前に出た、その時だ。相手が前に踏みこみ、するどい氣勢をあげて竹刀を綾太の面に叩きつける。

「メエエエエツエエエエン！」

残心を取ると赤い旗が三つ一斉に上がった。綾太はふらついたかと思うと膝が抜けて尻餅をついてしまった。防具で触れられないのに頭を撫でる。

審判に声をかけられ、のそりと立ったが動きは鈍い。さっきの一撃で吹き飛ばされたように気迫は消え、あとは一方的だった。一分もしないうちに小手を打たれ、負けてしまう。県大会は同じ戦法が二回通用するほど、甘くはなかった。

一方、入谷先輩は順当に勝ち進んでいった。いくらか攻防はあるものの安定した動きで一本を重ね、全てストレート勝ちで優勝した。あまりにも順調で写真を撮るのが難しいほどだ。もつと勝負を見たかったんだけどな、と心の中で愚痴る。

最後の試合が終わると、表彰式、閉会式と手際よく進んでいった。二人が観客席に戻ると、すぐに剣道部員たちに取り囲まれる。人の輪を綾太はすり抜け、席に座るとへたれた髪を手でバサバサとはらう。そして頭頂部を指先で触った。まだ面の衝撃が残っているようだ。

「お疲れ様です」

楓が声をかけても放心状態だ。

「格好良かったです」

「うん。でも、二回戦で負けちゃったし」

「そんなの関係ないですよ！　すごく格好良くて惚れ直しました」

俺がいるとお邪魔虫だな。トイレに行くフリをして席を立つ。会場をゆっくり一周してから戻ってくると、二人はもう離れていた。

だが綾太の様子がどこかおかしい。なぜか背筋を伸ばして硬直していた。へたれていた髪もブワツと広がっている。

「なにかあったのか？」

「ふふん、秘密です」

その後、綾太は落ち着きをなくしていた。楓をチラチラと見ているのに、いざ目が合えばいそうになるとさっと顔をそらす。顔だけでなく丸い耳まで真っ赤にして。一体、何があったのだろうか。

試合後の打ち上げに向かう綾太たちと別れ、電車に乗る。一緒にどうかと誘われたが、部外者なので遠慮しておいた。結局、入谷先輩とほとんど話せなかったのが心残りだ。

このまま学校に寄って、写真の確認をする予定だったけど、明日に変更することにした。松葉杖で動き回るのは体力を使うのかヘトヘトで、座ったら寝てしまいそうだ。

最寄り駅で降り、改札前で楓と別れる。

「んじゃ、明日学校でな」

「あ、先輩」

「どした？」

「先輩も、頑張ってくださいね」

唐突に言われ、俺はつい動揺してしまった。

「へ？ な、なにが？」

「今さらとぼけないでくださいよ。僕、応援しますから。力になれることがあったら言うてください。裏工作でも根回しでも何でもやります」

「え？ うそ？ そんなにバレバレだったの？」

本気で驚く俺に楓はあきれ顔を見せる。

「あれでバレないと思ってるんですか？ そっちの方がビックリですよ。会場についてから、ずっと入谷先輩のこと気にしてたし、話してる時の先輩、目がキラキラしてましたよ。まあ多分、僕にしかわからなかったと思いますけどね。でも、不思議なんです。どうして入谷先輩なんですか？ ずっと苦手だと言ってたのに」

「それは……」

答えに困ると楓は「あ、すみません」と謝る。

「聞き出したいわけじゃないんです。ちよっと気になったただけなので。それじゃまた明

日学校で！」

ばいばーいです、と手を振って楓は駆けていった。呼び止めようと悩んだが、止めた。答えたくなかったんじゃない。俺自身が、入谷先輩への気持ちの正体を掴めていなかったんだ。

□ ■ □ □ 8章 □ ■ □ □

いち、にし、さーん、し、とギブスの足先に出た指先をにぎっては開きを繰り返す。ほとんど骨がくつついたのか痛みはない。試しに立って体重をかけてみる。大丈夫かなと思つたが、力をこめると骨に鈍い痛みが走つた。医者のおりとおり、夏休みが終わるまでギブスと過ごすことになりそうだ。

走るのはまだ無理だ。でも歩くのには問題ない。これなら、ちょっとした旅行くらいなら支障はないはずだ。

二週間後、俺は名古屋に行く。入谷先輩の全国大会を観戦するために。

これは新聞部の活動ではない。希望したけれど先生に却下されてしまった。『あくまでも学校は勉強の場であつて、部活に傾倒しすぎてはいけない』とのことだ。

新聞に載せる写真は剣道部の顧問が撮つたものをもらえることになつたが、納得できるわけがない。俺以外の奴が先輩を撮つても魅力を半分も引き出せない。自意識過剰だと思ふけど、自信はあつた。

だから一人で行くことにした。

会場は名古屋で、試合開始は九時半。

在来線では始発に乗っても時間に間に合わない。でも新幹線は高くて無理だ。前泊しようにも俺一人では泊まれるホテルはない。なので楓に相談してみたら、深夜バスを提案された。

調べてみると年齢制限がなく、支払いもコンビニでできる。親の同意書が必要な場合もあったが、字が綺麗な楓が代筆を申し出てくれた。お金はお年玉の残りを使い、足りない分は貸してもらえた。楓様様だ。

親には楓の家に泊まると説明してある。もう親同士で連絡はすませていて、あとは当日、俺が急用ができたことにすれば疑われることもない。

我ながら完璧な計画だ。

「ゆーきー？」

いきなり母さんが部屋をのぞいてきた。

「うわっ！　なんだびっくりさせんなよ！」

「変な笑い声を出してたのはそっちでしょ。それよりお祭り行かないの？」

「お祭り？　あそっか、今日か」

今日は八月最初の日曜日。『たかもりHANABI』の日だ。全国大会のことばかり考え

ていたし、骨折のせいであまり外出しなかったので日付の感覚が鈍っていた。なにより毎年一緒に行く綾太に先約がいるから。

「綾太くんで行かないの？」

「別に」

「なによ。ケンカでもしたの？ 県大会のとき『あいつメツチャかつこ良かったんだぜ！』と褒めまくってたのに」

「違えよ。あいつ……彼女できたから」

「そうなの!? そっかー。綾太くん、優しいもんね。なるほどー。だから最近、一人でダラダラしてるのか。——で？ あんたはどうなの？」

「うっさいな。俺は彼女なんて面倒くさいの嫌いなもの。興味ないのっ！」

強く否定すると母さんはイラつく微笑みを見せた。そして「あんたもいつか良い子が見つかるから」と生ぬるい捨て台詞を残して顔を引っこめる。

「もう。そういう態度が一番ムカつくんだよ。俺のこと、何もわかってないくせに」
無理解な母さんも母さんだけど、この苛立ちは自分にも向けられていた。

なんで今、嘘をついてしまったんだろう。

別に綾太が男と付き合っている俺には関係ない。なのに言えなかった。どんな反応をするのか怖かったんだ。

楓は張り切っていたが、相手は綾太だ。変なことを口走って空気を悪くしたらどうしよう。

考えれば考えるほど嫌な予感がする。

「あーもー！」

松葉杖を掴み、立ち上がる。「やっぱ行ってくる！」とリピングに叫び、玄関へ向かった。左足はスニーカー、右足にはギブス用の大きなサンダルを履いて外に出た。

夏祭りは二つの会場に分かれている。屋台がたくさん出るさきび拆尾神社と、花火会場のさきかわ拆川の河川敷だ。

神話によると、高守市は昔、大きな湖だった。中心には小さな島があり、エナガという鳥の尾を持つ神様がたった一人で住んでいた。

神様はずっと外の世界に憧れ、ある日、ついに雷を落として盆地を囲む山を『裂き』流れ出した水は川となった。だから『拆川』なのだ。

力を使い果たし、神様は休憩に入った。しかしあまりに長かったせいで尾に植物が絡みつき、立ち上がったときに抜けてしまったという。かつて島だった小山の頂上にある拆尾神社の本殿には、その尾がご神体として安置されているという。

二つの会場は商店街がつかないでいる。アーケードには煌々と明かりが付き、多くのば

んぼりが吊り下げられ、たくさんの露店が並ぶ。普段は十九時にはほとんどの店が閉まってしまいが、今日は特別だ。

商店街の露店は去年始まったばかりで、統一感が全くない。屋台みたいのにのれんのついた店構えの所もあれば、和菓子屋さんの冷やしぜんざいみたいに長机に布を敷いただけのシンプルなものも様々だ。

中には紳士服のお店が帽子を売っていたりと、お祭りと同関係のない露店もある。でもみんなが盛り上げようとする雰囲気は文化祭みたいで好きだった。

アーケードを進み神社へ向かう。すると大きく開いた正門が見えてくる。

門をくぐると空気が変わった。まず迎えてくれるのはボンヤリと光るけんとうちやうちん献灯提灯だ。

寄付をした商店や企業の名前が筆字で書かれ、高さ三メートルほどの鉄パイプのフレームに取り付けられている。数は百以上ある。左右にそびえる薄暗い壁は不気味さもあり、まるで別の世界に入るための通路のようだ。

だがそこを抜ければ色が溢れている。『たこ焼き』『焼きそば』『わたがし』『射的』のカラフルなのれん。呼びこみの声があちこちから聞こえ、かき氷マシンが勢いよく氷を削り、りんごアメが照明を反射してツヤツヤと光る。

美味しそうな焼きそばのシズル音に、ソースの甘い匂いが混じってお腹がぐうと鳴る。財布を持ってくれば良かったと後悔した。

神社の本殿は長い階段の先であり、根元には狛犬が二体鎮座している。人の流れから離れているので、定番の待ち合わせ場所だ。

予想通り、右の狛犬の前に綾太がいた。紺地に薄い白の縞模様が入った浴衣に黒い帯姿だ。去年も同じもので、紺なら剣道の袴を着てくればいいじゃんとからかった記憶がある。

緊張しているのか何度もスマホを確認したり、草履で石を蹴ったりと落ち着きがない。それから数分もしないうちに、楓がやってきた。大きく手を振って駆け寄ると、ベージュの浴衣の裾がひらひらと揺れる。太めの帯はタイルを貼ったようなデザインで相手の趣味に合わせたと一目でわかる。両腕を広げて見せびらかすと、綾太はわかりやすく頭をかいた。

楓は綾太の手を取り、喧嘩へと引つ張る。あまりの勢いに前のめりになってもお構いなしだ。俺も追いかけて、尾行を開始した。

初めは二人は手をつなぎ、屋台を見て回っていた。しかし綾太が急に手を離し、近くのかき氷の屋台に向かう。そんなにかき氷が食べたかったのかと思いきや、通路に背を向けた二人の後ろを綾太のクラスメイトが通りすぎていく。

楓に気付かせまいと綾太は身振りを大きくし、二人分のお金を払って楓にもかき氷を手渡す。楓は笑うが、笑顔はぎこちなかった。

手をつなぎたい楓と、つなぎたくない綾太の攻防は続いた。

綾太だって内心では嫌がつているわけではない。でも近場のお祭りだから顔見知りはこちらにいる。恥ずかしさが半分、もう半分は……言葉にし辛い感情だ。

綾太も罪悪感があるのか両手を使う食べ物を買ひ、手が塞がるようにしていた。焼きそば、たこ焼き、フライドチキン。明らかに食べ過ぎで、お腹が膨れているのが遠目からでもわかる。

段々ときこちなくなっていく雰囲気は歯がゆくて松葉杖で地面を突く。すると、後ろから肩を叩かれた。

「ちよつとちよつと」

「ん？　なんだよ——って？　ええっ!？」

驚きのあまり大声を出してしまい、慌てて物陰に隠れた。

「びっくりさせないでくださいよ」

「ごめんごめん」

紺の甚平姿の入谷先輩は顔の前で手を立てる。制服や袴姿しか見ていないから、ラフな格好は新鮮だ。

「なんでここに？」

「友達と来ていたんだけど、君が気になって」

どういう意味だ？ そんなわけのないのに脳が勝手に期待してしまふ。

「だってお祭りの会場に、松葉杖の子が一人で歩いていて、しかも誰かを尾行してるみたいな動きをしてるんだもの。すごく怪しかったよ」

「あ……そっか。そりゃそうですよね」

安心とガツカリが同時にやってきて、深いため息をつく。そうしているうちに綾太たちは十字路を曲がり、屋台の影に姿を消してしまふ。

「やべ。歩きながら話しましょう」

「あれって長谷部くんと新聞部の初島くんだよ。どうして跡をつけてるんだい？」

「ちよつと事情があつて」

二人はお面屋にいた。楓は綾太にはタヌキ面を、綾太は楓にキツネ面をプレゼントしよう。仮面を被つてはしゃぐ様子を見ていた先輩が遠慮がちに口を開く。

「もしかして、あの二人は付き合ってるのかい？」

答えに困つた。本人がいなくてセクシャリティをバラすのは褒められたことじゃない。それに今の状況だと楓だけでなく、綾太も男が好きだという意味にも取られてしまう可能性もあった。男が好きなのではなくて楓が好きだけ、という複雑な説明を完璧にする自信はない。

なにより先輩は男同士の恋愛をどう思うのだろう。頭ごなしに否定する人ではないが、

少しでも嫌悪感を出されたら、と考えると怖かった。

「そうなんだね」

無言が答えになってしまった。変だね、とかキモいとか言われたら、もう立ち直れない。俺は恐々としながら次の言葉を待つ。

「お似合いじゃないかな」

「え？ そ、そうですよね！ あの二人って両思いのくせになかなか進展しなくてイライラしてたんですよ」

なぜだろう。綾太と楓のことなのに、自分も救われた気がした。

「県大会で試合前に話していたよね。あの子の長谷部くん、修羅が乗り移ったみたいだったし、もしかしてと思ってたんだ」

二人はスーパーボールすくいを始めた。どちらが多く取れるか勝負するのか綾太は袖をまくり気合いを入れる。しかし大きいものを狙い、一発でポイが破けてしまった。

次にチョコバナナを買う。綾太はただ好物を買っただけだが、光沢のついた頭を啜えた瞬間、楓はさつと目線を外す。心配したのが馬鹿みたいにお祭りを楽しんでる。ぎこちなさもいつの間にか消えていた。

仲の良さに当てられて、頬が熱くなる。このままずっと見ていたくなるけど、のぞき見は良くない。お邪魔虫はさつさと退散しよう。

「先輩、もういい……あれ？ 先輩？」

さつきまで横にいた先輩がいない。周囲を探すと、近くの屋台で紙袋を受けとっている所だった。それを抱え、小走りに戻ってくる。

「どう？ 動きはあった？」

刑事ドラマみたいなセリフと共に様子をうかがう。なんだか状況を楽しんでいるみたいだ。紙袋からはベビーカーカステラの甘い香りがする。

「匂いに負けちゃって。これなら松葉杖でも食べやすいし。はい」

一個差し出され、俺は反射的にあー、と口を開けた。先輩はカステラを唇に乗せ、指でつつく。口内にふわふわのボールが転がりこんだ。

「佐倉くんって兄弟いるのかい？」

「いふえ、一人っ子ですけど？」

「そうなんだ。お兄さんがいそうなのに」

変なことを聞くんだな。不思議に思いつつ噛むと、生地がほろほろと崩れ、閉じこめられていたハチミツの香りと甘さが一気に広がった。ザラメのザクザクとした食感もバツグンですぐに飲みこんでしまう。

「美味しいです」

「だね。もう一つ食べる？」

今度は紙袋の口を俺に向けた。そこで、さつき差し出したのは手渡しするためであつて、食べさせてくれるためではないと気づく。

「あ、すみません」

「両手が塞がってるしね。欲しかったら言つてよ」

「え？ あ、じゃあ。えと……あーん」

入れやすいように丸く口を開くと、先輩は微笑んで食べさせてくれた。

「今日、財布持つてくるの忘れちゃつて。晩ご飯もまだだからお腹空いちやつて」

一体、誰に言い訳をしているんだ。なのにベビーカーの美味しさには勝てない。しかも先輩に食べさせてもらうと、別の甘さまで胸に広がる。

一個、また一個と飲みこむ内に、段々どっちが欲しいのかわからなくなつてきた。際限なく欲しくなるが、変に思われたくない。先輩が一個食べるまで、おねだりは我慢した。

甘えるつてこういうことなんだろうか。

俺は一人っ子だし、親しい親戚にも兄ぐらいの年齢の人はいない。新聞部の先輩とは仲が良いけれど気はつかうし、学校外で会うこともない。

だからこんな風に年上の人と遊んだことなんてなかった。まして、お菓子を食べさせてもらうなんて。普段ならプライドが許さないのに先輩だと遠慮のハードルが下がる。

俺は楓たちが心配でここに来た。お祭りを楽しむのが目的じゃない。なのにこの時間が長く続けばいいのに。なんて願ひ始めていた。

十九時をすぎると太陽も沈みきり、空が暗くなる。それにともなつて境内を歩く人の数が減り始めた。花火を見るために、みんな河川敷に移動しているのだ。

しかし二人は人の流れに逆らい、神社の奥へ向かう。

「どこに行くんだろう？」

先輩が当然の疑問を口にする。本殿前には有料の観覧席があるが、値段が高いので俺たちみたいな学生には縁がない。

待ち合わせをした階段まで戻ってくると、脇にある薄暗い木立の中に姿を隠す。そこには丘をぐるりと一周しつつ本殿へ向かう古い参道があった。踏みしめられただけの獣道に近いものだ。

「この先にとつておきの場所があるんです」

追いかけて参道に入ると木々でお祭りの賑わいが遮られ、代わりに虫の音に包まれる。草木と腐葉土の強い匂いに甘さでふわついていた意識が急激に覚めていった。

昨日降った雨が乾ききらず、湿った土や枝は踏んでも音を立てない。尾行には絶交のシチュエーションだ。

「滑りやすいから気をつけて」

参道にもちろん照明はなく、所々に木の根や石が露出している。途中の段差には丸木で作った階段はあるが、ほとんどが腐って朽ちている。地面に突いた松葉杖が滑らないか毎回確認しないとイケなかった。

「大丈夫です。いけます」

松葉杖で未舗装の道を進むのはかなりしんどい。普段は体育以外で運動はしないし、しばらく家でダラけてばかりだったから、元々少ない体力はさらに落ちていた。すぐに汗だくになり、額から流れた汗が目に入って染みた。立ちどまり、Tシャツの胸元を引き上げて顔を拭う。

なんで俺はまだ二人を追っているんだろう。

二人の仲は疑いようがないし、この後のことなんて見ちゃいけない領域だ。なのに成り行きのまま尾行を続けている。

「佐倉くん？」

数メートル先を進んでいた先輩が振り返る。考えすぎて足が止まっていた。

「大丈夫です」

綾太の言葉を思いだす。あいつは人の気持ちをもザイク画に例えていた。相手への思いが大きくなると画も巨大になり、遠くからでないと全体が見えなくなる。感情という色も増えて複雑な模様を描く。

二人への俺の思いはまさにそれだった。初めは後輩と親友に幸せになって欲しい、という純粹な動機だった。しかし時間がたつにつれ、想定外の色が混じりだした。ただの汚れと勘違いするほど小さかったのに、全体が巨大に複雑になると、さらに増殖し、今では色味まで変化させている。

その気持ちに俺は気付いていた。でもずっと無視し続けた。大きくなっていく心を離れて見ようとせず、近視眼的になろうとした。罪悪感は親友と離れる寂しさだと思いついで。

なのにさつき、先輩が二人がお似合いだと言った時、自分の気持ちを直視してしまっただ。

俺は……男同士が上手く付き合う姿を見て安心したいんだ。

かあと顔が熱くなり、心の中で、くそつと毒づく。

最低だ。二人のためとか格好つけていたくせに、自分のためだったのかよ。

苛立ちに任せて松葉杖を大きく前に出し、振り子みたいに体を浮かす。だが次の瞬間、右の杖が横に滑った。右足に力を入れるが踏ん張れず、勢いのまま倒れてしまう。

「いってえ……」

右半身を強く打ち、衝撃は骨にも響く。視界が青く染まり、しばらく動けなかった。

「大丈夫かい？」

先輩が慌てて駆け寄り、俺を抱き起こす。返事をしようとする口の中で土の苦味が広がった。暗い地面にツバごとはき出す。

痛みはすぐにおさまったが右半身は土まみれだ。ギブスも茶と白の斑模様になり、ギブス用のスリッパも飛んでいつてしまった。

先輩は俺の体や服を軽くはらい、靴代わりにハンカチでギブスを包んでくれた。甚兵衛姿には似合わないな、というどうでも良いことに思考が引っ張られる。

近くの倒木に俺を座らせ、草むらから松葉杖を探しだす。しかしスリッパは斜面を転がり落ちたのか見つからない。

「もう、いいです」

こんな状態じゃ山登りなんて無理だし、二人の姿はもう見えない。置いて行かれてしまった、という意味不明な寂しさが心に広がるが、同時に諦めがついた。これでいいんだ。俺には関係のないことだから。

その時だ。ぱつと周囲が明るくなった。一秒もしないうちに大きな破裂音が響き、再び空を覆い隠す枝葉の隙間に鮮やかな光がきらめく。花火だ。

輪郭も見えず、音も木々に遮られて遠い。何の感動もないけど目が離せなくて、俺は空をぼうつと眺めていた。

すると膝を叩かれた。はつとして先輩を見ると、なぜか背を向けてしゃがんでいる。

「乗って」

ジェスチャーの意味を理解するまで数秒かかった。

「いや、汚れちゃいますし」

はらったとはいえ、服は湿った土まみれだ、

「いいから。ほら」

せかされて渋々背に体を預け、首に腕を回す。

「しっかり捕まって。いち、にの、さんっ」

先輩が立ち上がると一気に視線が高くなった。そして勢いよく暗い参道を歩きだすものだから、怖くてつい抱きつく腕に力がこもる。

細身だけがっしりとした体は頼もしくて、黒々とした髪が顔に当たるとチクチクと痛い。刈りあげたうなじは汗をかいていて、キラキラと光っていた。しがみつくとき首筋に顔が近づき、先輩の匂いが――。

やばい。こんな時なのに反応しそうになり、ギブスから出た指先をグー、パーと動かして必死に気をそらした。

「その岩で止まってください」

参道の七合目、大きな花崗岩の手前で背中から降りる。

口の前で人差し指をたて、足音をたてないように右手の斜面に近づく。端から下をの

ぞくと、綾太と楓の後頭部が見えた。三メートルほど下にある小さな岩場に二人が座っているのだ。

岩場はちょうど河川敷を望める方角にあり、枝葉も避けるように円形に開けている。空に大輪の花が咲くと、二人の背後に濃い影が一瞬落ちた。

「こんな所があったんだ」

「俺たちの秘密の場所なんです」

小学校の頃、探検をしていたら発見した秘密の場所だ。

通称『綾貴の岩』。綾太の『綾』と悠貴の『貴』を合わせて命名したもので、ここで花火を見るのが決まりだった。指切りしたわけじゃない。暗黙の了解ってやつだ。

けど今日、横にいるのは楓だ。

一昨年の夏。進学する直前のことだ。『もし彼女ができたら、この場所を使ってもいい』という話をしたのを思いだす。だから、二人があそこにいることに文句はない。

なのに俺は嫉妬していた。二人の間で重ねられた手が、余計に情緒を不安定にさせる。俺は綾太に恋愛感情は持っていないのに、恋人を取られたみたいなき分だ。

しばらく二人は花火をじっと見上げていたが不意に青白い光が見えた。スマホだ。すると急に楓が振り返り、俺は慌てて身を隠した。どうやら写真を撮ったらしく、通りの良いシャッター音が響く。

少し待ってから覗くと、写りを確認しているのか一緒に画面をのぞきこんでいた。自然と体が近づき肩が当たる。二人は同時に顔を上げ、視線が重なった。

時が止まったかのように見つめ合うと、顔を近づけ――。

*体験版はここまでです。

気に入りましたらぜひご購入お願いします！